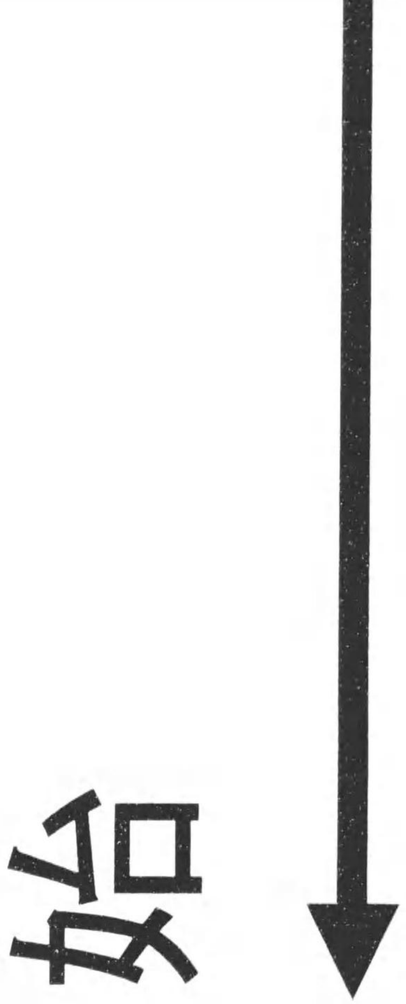
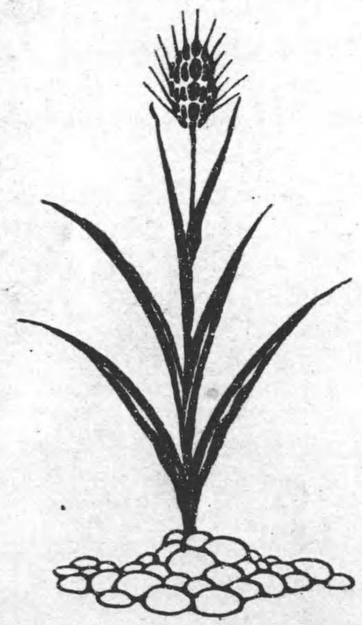
6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6


姑

544
34

修道院雜筆

木羅風



新潮社出版

大正
14.8.17
內交

544-34

自序

此修道院雜筆には私がトラピスト修道院にゐた時に書いた十一の文と、東京にて修道院修道者及び我が信仰等に關して書いた四つの文とが收められてゐる。私がそれらの文を書いた年は一九一五年から始まり一九二四年までである。

修道院雜筆には手紙、短き小說、感想文、日記、小品、隨筆、演說の草稿等の文が含まれてゐる。卽ち雜筆の名のある所以である。

私が最初に北海道のトラピスト修道院"Notre Dame du Phare"を訪ねたのは一九一五年の七月であつた。私は更に其翌々年の一九一七年にトラピスト修

道院を訪問し、又更に一九二〇年には、天主の御恩寵に由つて、同院の志願者等の爲の教師として妻を連れて赴任した。かくして私等は、そこに在りて信仰を得た。

天父は我等を導き給ひ、多くの御惠を我等に賜ひ、我等の信仰を一層堅くし給ひ、かくて聖旨の儘に我等は一九二四年六月三十日、トラピスト修道院を辭して東京に歸つた。トラピスト修道院より下つてからの私の感想は此修道院雜筆の終に收めてあるところの「トラピストより下りて」の一文に記したから讀者諸君が其文をお讀み下さるよう私は希望する。

一九二五年七月中旬

三木羅風

修道院雜筆 目次

トラピストと愛の力……三
トラピストより……一三
聖體の大祝日前後……二四
一、穀草倉の學校……二四
二、歌行列……三一
三、奇蹟……三九
信望愛の生活……四三
トラピスト修道院にての我が春の日記……四三
トラピストの夏……五九

七つの岬……六七
トラピスト天使園の童貞……七五
修道院に於ける羅馬教皇使節……八九
北窓雜記……九一
當別から……一〇九
トラピスト修道院より……一二五
聖小さきテレジアの詩……一二九
善と勤勞との精神……一三五
トラピストより下りて……一三九

裝幀——黑澤武之輔氏

修道院雜筆

三木羅風

トラピストと愛の力

トラピスト修道院のタルシス修道士は農場の方を鞅つてゐるので、祈禱の間には厩を通つて廻りにゆくのである。茶褐色の厚ぼつたいダラリとした修道衣を着けて、もうペタンコに磨滅らして了つた木靴を穿いて、手には短い杖を突いてゐる。タルシス修道士は和蘭で生れて最も若い時を故郷で過ごして、それから羅馬の修道院へ入つた。日本へ渡つて來たのは二十八の時であつた。それからしてもう二十年餘りになるのであるからタルシス修道士の頭は禿げた、しかし神様の忠實な僕であるこの人は心の老いるやうなことも

なく、熱心で一途な子供の稚氣を持つてゐるのである。

日が昇つて農場の露が乾きはじめる。するといろ〳〵な草や花のにほひが

する。牛や馬の喜んで食べる白クローバは、てんでに目ざめて、ポツチリとした眼を思ひ切り睜つて、押團まつて朝の空氣にうるほひながら路も狹に咲いてゐる。タルシス修道士の木靴は其處の草場を踏みしめるのである。その踵や緣には露と、草の青い汁と、そしてすゞしい匂ひとがへばり附いて居る。

毎朝牛は夙くに厩を出て、一旦群をなして集つて、其れから厩の若い者に伴れられて、その日の定められた牧草地へと尻尾をふりふり跟いてゆく。五十匹、六十匹――大きな背をうねらしながら、小高い山から谷の勾配へとそして谷からまた向うの小高い山へとだん〳〵と行つて豆のやうに小さくなつてしまふ。

羊は夏のころには、そのめんだうな長い毛を刈られてしまひ、さつぱりとしてめいゝ鳴きながらこれも幸福な美味い草のある場所へと伴れられてゆく。

鶯鳥は構つて呉れ手が無いので、人が來ると仰々しく叫び立てながら水の畔りを風が吹いて轉がつてゆく綿のやうに馬鹿々々しくあるいてゐる。

無論、この時蜜蜂は敏速に舞上つてゐる。彼等は日が素絹のやうに輝いた中を點となつてとぶかと思ふと、フイと其中へ吸込まれてしまつて見えなくなる。彼等がたづねてゆく花の種類はこの農場にどれだけあるかわからない。それは我々は氣がつかないで居るが、かずの知れないほどいろ〳〵な花が咲いてゐるのであらう。さうして其大小の花の壺から香りをみなぎらして、それが縺れ合つて、音のないスインホニーのやうにこの修院の場一ぱいにひろがつてゆく。それらの花へ行つて蜜蜂が脚で花粉をふくらませて還つて來るまでに、何れ丈の時がかゝるか知れないが、この函の出口には仔蜂が澤山群れてゐて、まちうけ顔に愾快な翅の音をさせながら盛に逍遙する。熱い昂奮した、透とほるやうな精氣がそこを通る。そして蜂と蜂とは互に盛り上り崩れあひながら、琥珀色の陶醉的な歌がそこから流れて出る。さうするうちに、

日がだん〳〵と高く白くなつてゆく。

タルシス修道士は大きな掌をあげて鷺鳥を追ひながら、或はその杖に靠りかゝつて羊番と話をしながら、或は非常な優しさと、周到な注意とで蜜蜂の函の蓋を除つて、その金色の、蜜集した王國を碧い眼でのぞきこみ、それからまたそつと蓋をして、白楊の並び立つた林を、髭髯をしごきながらあるいてゆく。この人と動物との親しみは、寔に深いものである。

もう何年も前、この人は日本の修院のために立派な牛を求めやうと、遙な和蘭の故國を指して往つたのである、さうしてホルシュタインの類ひ稀な美しい牛を伴れて歸つて來たのである。その牛は最早居ない。その牛は澤山の乳牛を聖堂のために造つておいて、それから己れのやうな壯麗な體軀を持つた一匹の種牛をも生み殘しておいて而して死んでいつたのである。その生みのこされた種牛は第二オランダ號と云つて、廣き牧草地の只中に繫がれて、キラキラと輝く修院の塔の下に寂寞な、そして雄々しき聲で鳴くのである。

深い攝理よりして日本の北海の斷崖に居る之らの牛は、タルシス修道士と殆ど隔意の無い間柄である。タルシス修道士が牛の群の中に、或は羊の群の中に居るときほど、タルシス修道士に似つかはしいことはないのである。これは、此人自身さう思つてゐるにちがひないのである。これらの動物はこの人の手で育つて來た。さうして勘定する者の知らない溫かな心がそこに通つてゐた。こゝろみに此人が牛の群に圍まれてゐるところを見たまへ、通常牛何十匹と知れずかたまつて、ふんふんと鼻を鳴らして、尻尾をさかんに振つて、賑かな音をさして草を食つてゐる中へ入ると、たしかに牛の圈內といふやうなものがあつて、思はず大概は出場を失つてうろたへてしまふものだ。ところがタルシス修道士の胸髯の、そして慈悲深い腕のところへは、のそりのそりと種々な牛がやつて來て、忽ち大きな牛の頭でこの人は圍まれてしま

ふ。さうするとこの人は額のところを鳥渡撫でてやつてもう澤山、向うへ行けといふやうな手眞似をする。這麼ふうに隔意の無い話といふものはありはしない。

牧草を刈る車輪の音は鋭くひゞいて居る。二頭の馬が上手に差廻す若者を乘せて駈つてゆくと、後に附けたよく研がれた横に長い鎌はスルスルと草を根こそぎ刈倒してゆく。その鎌の刄は草に馴染んで一層青白い色をしてゐる。

タルシス修道士はその傍へいつて其刈具合を見てゐるのである。低い馭者臺に居る若者は二言、三言言葉を交してから、長い紐のついた鞭をあげて舌を鳴らし〳〵進ませてゆく。小山の中腹を向うの端れまでゆくと青い空がその小山の端にかゝつて、二つの馬の首と麥藁帽子とが前景をつくる。さうして再び其車がこちらへ戻つて來た時にはタルシス修道士は滿足して、兄弟を賞めるやうな挨拶をして其處を離れてゆく。路の上に石が轉がつてゐると其石を除けておく。さうすると其處の路をめつぽふ高く積んだ車が二三臺つゞいてガタ〳〵と通る。

日盛りのこの廣大な農場には數十人の百姓が――これは皆信者であるが――殆ど總出で働いて居る。何處で如何働いてゐるか見定め難いほどである。バラ播にした燕麥の畑は日に〳〵色づいて黄色の陵が並んでゐるが、それはたゞ日の照る下にひつそりとして、手を入れる者もないやうに見えることもある。「あれはもう刈取つてしまはねばならない」とタルシス修道士は百姓らしく考へて居る。その時、その額に粒の汗が見える。この人は帽子がきらひで日盛りにも被らないで、どうして被らないのであらうと人が言つたら、いや私の頭は固いと應へたのである。それで其のあたまが益々禿げるのではないかと思ふほどである。

澤山の百姓の中には少しづつ怠けて、日中は涼しい穀草倉の蔭で莨を呑み

一かたまりになつて話して居るやうなこともあり、厩の若い者同志で邪の無いいたづらをしてゐたりする。さういふ時にタルシス修道士が通りかゝるにしても小言の種になるやうな例はない、この人は鼻に癇疾があつて、絶えず咳拂をするので、この人が來たといふと遠くの方から直に知れてしまふ。それで誰も神妙にしてしまふのであつて、怠けて居る者も無いやうなのである。「あなたの眼は鼻のお蔭で届きませんね！」と這麼ことを私はある日冗談にして言つた。するとこの人は「その事ですか、おゝそれならちがひます」と答へた。「鼻がわるくて咳拂をすれば皆、わたくしの來たことが分つて働きます、それで働きが悪ければ、立停つてそちらを見てゐれば、それで氣が付いてはたらきます、皆さん給仕ではありません――みな兄弟」とあるきあるき熱心に言つた。それからして此人は次のやうな言葉を附加へたのである。「フランシスコ・サレジオは立派な聖人でした。その人が、言ひました。嚴しくすると、好くするのとの眞中を取れ、けれども何方かにせねばならぬとすれば好くする方をとれ――フランシスコ・サレジオは然う言ひました」……

隣地はK――男爵の耕作地である。K――男爵は金があると村の人は言つてゐる。金があるから結局遣り遂げるだらうと言ふのである。なるほど男爵はやり遂げるにちがひない。男爵は意志を以て貫ぬいてゐる人であるから。けれども事實は意志の外に尙大きな力が大切であることを語つてゐるのではあるまいか？

同じやうな小作人に對して、一つはそれをボーイとして使役する、一つは兄弟同志で働かせるといふ斯ういふ二つの對照がありとすれば、どちらが善い耕地を得て、澤山の財寶をそれから取上るであらう、それは愛の力の方である。金ばかりではない、また意志のみではない。

私はさういふことを心に思うたのである。

鐘樓の側のオンコ(栂の木)の傍に院長とタルシス修道士とは立つてゐた。日は黄ろく霞がかゝつて春き初めた。老年の院長の手には牧草攪拌用にする長い三ツ叉のホークがあつた。それを眞直に杖突くと院長の首の上まで來た。智と仁とを各々別々に表はしたやうな二個の影はそこにあつた。丁度其處は聖堂の入口である。

晩禱を告げる鐘は先程から一つ一つ鳴るのであつた。タルシス修道士は、その忠實な僕の仕事のために後れて聖堂に一番おそく入つた。さうして一番遲く來たこの修道士ははるか堂の隅の方に立つてゐて、遠くから合唱した。きものはよごれ、靴は磨滅つてゐる、額にはまだ野の汗が乾かないのである。

千九百十七年

トラピストより

靜かなる宵

靜かな宵に蟲が鳴いてゐる。チロチロといふ聲、耳に入つて魂も澄む。我が秋は淋しい。今トラピストでは夏よりかけて客が遊參に來る者が多く賑つてゐる、北海の聖地となつた。日に日に、年々に、その賑かさを加へてゆくのはわるくはないが、沈默と靜寂との美を俗衆が解しないのでは困る。

靜かな七日ばかりの月が、夜九時ごろ早、山に沈むとて輝きを放つて居る。星は闌干として空に滿ち、その神祕な光を交錯してゐる。いつも星を見る。夜になれば屢々星をあふぐ。星座表もあるが、科學的に見るのでもなく、ただ廣々とした宇宙の無局の天を仰いで長嘯するのが好きである。月や星の光

ほど夜に美しいものはない。月は誰にも賞されるが、曉星のかゞやきの美しさまた格別である。曉星はローマ、カトリック教會では聖母マリアを表はす星であるが、その白と綠の光と、色をして、凉しい空にかゞやき、或は海の上に、或は廣漠たる野の上に、或は穹窿形聖堂の十字架の上に燦々とまたゝいてゐるのは心ゆくばかりである。

雲

雲もまた此處にあつてはながめが美しい。壯大な山巔の雲は絕えずいろいろの形狀を變化させる。日常の生活の中から人は容易に天を友とし得ない。東京では飛行機を仰ぐよりほか天を仰ぐときは尠い。しかし人はその忘れてゐる空を仰ぐことによつて、かぎりなき歡喜に充たされる。かぎりない歡喜は地より來らず空より來る。空のはて遠いところ雲雀の告ぐる聲は天の福音か讃美歌のやうである。シエリーも、ひばりの事を、何にも譬へやうのない美として、言葉をつくしてその "To a skylark" (雲雀)の中に歌つてゐるが、今でこそ雲雀をきかないが四月、五月、六月は、至るところにその告天子の聲をきいて、はるかに天を思ひあこがるゝことが多い。

ひばりは、げに告天子と作ることこそ善けれと思ふ。彼の鳥ばかりは雲に入り地に向つて、天を讃美する、象徵的な鳥である。

鳥の類

今ごろは閑古鳥も山鳩も奥山深く隱れて、青葉に啼くほとゝぎすの聲も稀になつて行つた。たゞ庭と澤の木の茂みには頰白がなく、そのさわやかな聲は愛すべきである。雀はこぼれた米粒をひろひに背戸のところに來て覓にとまる。洗濯の人の側ちかく來て恐れない。昔アッシオジの聖フランシスコは、

小鳥に向つて説教せられたが、小鳥は愛によく感じるやうである。すべて造られたる者のうち何一つ愚なものはないが、小鳥のなく音は微妙じいものゝ一つである。

この頃のすさび

この頃短唱を多く作る。短唱は予の行住詩錄と見ることが出來よう。此の詩形を得て慰むことが多い。一つ二つ記すもよい。

○

月、光を流す
曉の戸
靜なり、たゞ。

○

櫨の紅葉
青松が中にまじり
秋を感ず。

草の丘

日、照り
靜なり
喜ばし
朝の草の丘。

心にもない詩を作つてあざむくよりは、心ばかり、獨り樂しむのは宜い。

昔稽康が「山澤に遊んで魚鳥を觀る」と言つた心こそ、いつの世までも失ひた

トラピストより

くないものだ。

晴天の時

天氣の好い時、山に雲が少し下りて靜かだ。海の潮の音もせず、對岸の青森の斗南半島など霞を着てゐる。東洋一の尻矢崎燈臺は、晝間は全く光を奪はれてゐるが、星夜よく晴れた海上はるか彼方に、その光芒を放つのが見られる。殊に夜美しいのは、函館沖より當別沖へかけて出る船で、いか釣舟である。およそ灯の數、數千にして、計り知れず、一望洋々たる海に滿ちてかがやくのは、地の群星かの如く、又、時ならぬ海の祭を行ふかのやうに見える。しかしまた斯うして見る美しさの內面には生活の苦もあらう。曉に至るまで、さうしてゐる舟子たちの生活には人の世の勤勞の運命が結び付いてゐる。時として夜半暴風雨に遭ひて身を墮すものもあるといふ。

臥牛山

函館の臥牛山は、いつか蘇峰學人も來て曰はれし如く池中の景のやうに見える。トラピストは高原の俤を有し、海上數里にわたる間を盆地とする大景を有してゐる聖地である。函館は巴の港と云つて、長崎と共に日本で最も美しい港である。その灣が深く入りこんで山にかくれ、鐵筋コンクリートの新しい町が並んでゐる。人口は十五萬餘、札幌小樽よりも少し大きい、ただこれは人口だけのこと。

木古內はトラピストの右方に當り函館戰爭のあつたとき官軍の上陸地となつたところである。昨年この下の街道の中央から一武士の遺骨が發掘された。一つの運命であつたか郵便局長の母の何十年忌に相當してゐる日に、その局の前の道路で子供の遊びから發見せられたのだといふ。私はそれから出た刀

の折れや又その鍔などを一見した。思ふにかういふ無名の殉死者、犠牲者が維新前後には隨分多いことであらうと思はれた。

江差と松前

福山（松前）には鐵道が引かれようとしてゐるが、まだいつのことだかわからない。昔の名ある城下も今は衰へようとしてゐる。廢滅の町にならうとして居る。追分で名高い江差、今は歌に名殘をとゞめる。けれども此町より開けて松前も復活する期は近い將來にあるであらう。

トラピストの形勝

よく此處に來る者は、トラピストの風景を所謂奥北海道と全く異つた物とし、內地に近いといふが、それは北海道の札幌等と比較してのことで、內地ともちがうてゐる。私は各地を見てゐるけれどもこの修道院の所在地のやうに變化と美との多い形勝の地を餘り見ない。

植物の多いのは空氣をすが〳〵しく、そして呼吸に善くする。餘り海岸では、殊に樹木の尠い海岸では此感がない。植物の間を、木や草や花の匂や、又海のオゾンをふくんだ風の通つて來るのは、何とも云へず、すが〳〵しい。海岸の道の日に燈けてあつく蒸してゐる處から、高原の氣分あるトラピストの地帶に來ると、海潮の氣の强さと、日のたまりがなく、植物に緩和されて空氣の清淨なることを確に感じる。

はたらき

修道士は秋の牧草の刈入れに忙しくなる。

「祈り　且つ　働け」

これはトラピストのモットーである。

牧草の香りほど野の親しみを感じさせるものはない。苦熱の中にも一種の柔かさと慰めと詩とを送るのはこの黄ろい牧草の匂である。殊に畫のやうにと、ころ〳〵高く積まれた牧草の山と、そしてその彼方の背景をなす丘に小羊の群が群れてゐるのは、ビザンチン風の十二使徒の肖像をゑがいたステンドグラスの入つてゐる聖堂とに對して、はるか西方の歐洲文明の、而も中世紀を偲ばしめる。

信仰の畫家セガンチニ、又はカトリックのほまれある善き畫師フラ・アンジエリコなど、みな信仰と高原の境とにあつて描いた。余は時としてセガンチニ、又はミレーのことを想ふ事がある。

黎明

あかりを點して朝の四時頃より起きる。アンゼラスの鐘の鳴るのは此頃である。まだほの暗い黎明の空になりわたる。ほがらかな、神聖な鐘の音よ。

かくて窓が明るくなり、灯の色と外の外光の色とがまじるやうになり、鳥のまばらな聲が、青い朝の綠の中に散らばひて聞え、やがて日の出るには間もあるまい。千九百二十三年十月

聖體の大祝日前後

一、穀草倉の學校

聖體祭の前の晩。「もしお暇だつたら、穀草倉の學校へお出でなさい、六時から歌をうたひますから」とのことで、私はT――修道士と分れた。晩の食事の後にはいつでも散歩に出る慣はしになつてゐる私は、この日N子と共に、誘はれた時刻に聖歌をきゝに行つた。外は明るかつた。陽が後ろの丸山に落ちてしまつてもう大分經つたのに、そこらは丁度鳥が羽ばたきををさめて憩うてゐるやうに透つた光が草の上に居てぢつと靜まりかへつてゐた。小舍に歸りきらない羊の後の方の列と、その後から追うて行く手に鞭を持つた少年の手足の動きとが、いかにも蕭やかに後ろから眺められた。

そのとき、山の林に閑古鳥がまだ啼いてゐた。閑古鳥のことを私たちはあるき〳〵話をした。あの聲は何とも言はれない安らかな、心も和むやうなこちを人に感じさせる。部屋に居ても戸の外に居てもこの鳥のこゑをきかぬ日はなかつた。次第に私はこの鳥に親しみを覺え、もしその聲を聞かぬときは心に想ひ起して淋しさを感ずるほどになつた。それにしてもこの鳥は、あまり里にちかく來ては啼かぬので、どんな形をしてゐるか、どんな風にして啼くのかわからずに居た。すると或日N子が「ごらんなさい、かつこうがゐますよ」と言つてしらせに來た。北の窓際へ行つて見るとなるほど裏の落葉松の木の梢に横向きになつて留つてゐる一羽の鳥があつた。羽のくろく斑のある、痩ぎすの、尾のぴんとして長い恰好のよい鳥だ。「あれが閑古鳥か」と言つてゐるうちに、かつこう、かつこうと續けて啼きだした。啼くたびに、前半身を上下に動かす。胸はいかにも一ぱいの力が漲つてゐるやうに張り出

てゐた。かといふ初めの音に強いアクセントが籠つて、こうと後は力をぬいて語尾が消えていつた。

うき我れを淋しがらせよ閑古鳥。といふ芭蕉の句が何時か私の胸によみがへつてゐた。この句の氣もちが、眞實なその境がその儘私のものであるやうにおもはれる。さうしてそれはたゞ淋しいといふばかりのことではない。靜かな樂しい情を抱かせる。天地に對する愛を感じさせる。この鳥が友のやうに來て啼かないときは淋しかつた。

聖歌を合唱する男女等の聲が、夕方の柔かい風に浮びながら聞えて來た。私たちは坂を上つて草原を横ぎり、その聲のする方へと行つた。軈て私たちは大きな野中の穀草倉に着いて、そこの戸に手をかけて開いた。青白い光をしてゐる硝子窓の、素朴なこの建物の二階は卽ち、明日、聖體の大祝日に行はれる行列に歌ふべき唱歌を大勢の百姓の男女達が復習してゐる唱歌學校であつた。

階下には何だか入組んだ大きな物が雜混と目に入つた。それは粉挽器械であつた。麥粉の匂ひと油の匂ひとが冷たく漂つてゐた。私たちはその間をひろつて突きあたりから左上へついてゐる狹いそして急な梯子を上つて行つた。梯子の階段があまり接近して付けてあるので、そこをのぼつて行くのに骨が折れて暇がかゝるのであつた。

その穀草倉の二階に六七人ほどの人が集つてゐた。彼等は較奥がかつたところに四角に腰掛をならべて、そこへ腰かけて肌の汗も臭ふばかりに寄り合つて聖歌本を手にしながら歌をうたつてゐた。最初に私の目についたのはそこに居るむすめさん達であつた。そのむすめさん達の三四人ばかりは早顔馴染であつた。あの人達は私の畑へ働きに來たことがあつたから。

Tさんは、中央で指揮棒をふりまはしてゐたが、私とN子とを逸早く認めて、「おう、ようこそ」と聲をかけた。すると、皆ながら振かへつて見た。私はそ

の動揺を制して、「さあ、始めて下さい、どうぞ」と言ひながら、少し離れたところに自分たちだけの場所を見つけて坐つた。

「けふはあまりよく出來ません」とTさんは笑ひながら額の汗を押し拭つて、

「では歌ひませうか」と言つて向き直つた。一同も向き直つた。

「アドロテーー　聖體のほめうたを」

とTさんは聲をかけて生眞面目な面で棒をとりなほした。

と、皆がその拍子に乘つて聲をそろへて歌ひだした。びり〳〵とその音響が硝子にひゞいた。そして穀草倉の空氣が遽かに跳つた。「あゝ、一つ低かつたですね、もう一段上げませう」とTさんは生徒の持つてゐる聖歌本を覗きこんだりして。自分も聲を合はせてうたつた。不思議なおもしろいこの光景よ！

Tさんは茶褐色の修道衣を着た一異人だ。そして此處に並んでゐるのは日本の若い男と娘たちとで、むすめたちは、いかにも百姓らしい素朴な身扮をして、頭によごれた風呂敷のやうなものをてんでに被つてゐる。このふろしきのやうなものは、式の時にかぶる清淨な白布のこゝろもちで、そのかはりにしてゐるのであらう。さうして彼女たちはわけのわからない拉丁語の聖歌をうたつてゐる。

長崎の平戸あたりの百姓はその昔、こんな風であつたのではなからうか。こゝに居る若い男や娘たち、又紅髯のTさんは、さながら切支丹伴天連の時代の場景を、そのまゝ現代に表はしてゐるのではなからうか。あのほめうたは、彼のときもうたひ、あの拉丁語の文字で書かれてゐるこれらの信者の持つてゐる聖歌本も、あの時やはりあんな風で手にとられたのではなからうか、あの聲は、あの百姓の身扮をした若い可憐な娘たちは、殉教の血の中からうたつた、昔のあの娘たちに、寸分ちがはぬのではなからうか。

かう思ひながら、私はその唱歌の聲を耳にしつゝ幻想の果てに思ひを遣り

目を睜つた。

N子は靜に默つて、二つ三つ積まれた麥俵の端に腰かけて、白い足袋をきつそりと穿いた草履の足を前へ投げ出してゐた。まだ日が暮れきらない。穀草倉の一つの窓から外を見ると、つい目の先きの牧場の柵に凭つて、牛がぢつと臥そべつてゐる。一つの牛は首を据ゑてこちらむきになり、一つの牛は向うむきになつてゐる。青い光線がその草の上にたゞようてゐる。そして柵の向うの崖を越して見えるのは、雲の反映の具合で、水銀のやうにとろりとして、展けた海である。

ほかの一つの窓に短い梯子が寄せかけられてあつた。私はその梯子に凭りながら、白いクローバの花が綠の濃いその葉の中で、地の星のやうに、むらがり咲いてゐるのを振返つて上より見た。するうちに下から重い、途方もない大きな木履の音を立てゝ上つて來た者がある。それはY――さんと言つてこの人は修道士ではあるが長身で、膂力があつて鬼のやうにつよい容付を持つてゐる。Tさんとは兄弟の和蘭人である。私はこの銅羅のやうな音を立てる木履へ目をやつた。大きな木履である。

「こんばんは少し手傳ひましたら宜しいでせう」と、これはN子へ愛想のつもりであつたのであらう。

歌は幾番も進んでいつた。大勢の人達は少しも疲れる樣子がなく、明日の祭の行列にうたふべきほめうたを、面を赤らめ、汗を出して、聲をそろへてうたつた。七時も過ぎたのに外はまだ明るい。

二、歌行列

大勢の人達は、今日ぞ晴れと着飾つて、男も女も、はれやかな面をして、修院の門のところに群集して待ちうけてゐた。この日は朝から暑かつた。眞

青な空に、陽がキラキラとかゞやいて、穏やかな南の風がソヨソヨと海岸から吹いた。ローマ、カトリックの信者たちが享ける基督の聖體に對する感謝の日としては、ほがらかな、ほがらかなこの暑さが、それにふさはしい愉悦の情を人々の胸に感じさせた。白い飾りのある着物をきせてもらつた子供たちは、跳び上つて母上の胸へすがりついたりした。母親がその子供を伴れて、ほかの母親のところへ行くと、母親同志と子供同志とすぐに楽しいさゝやきを交したり、叫を立てたりした。また或老人達は、律義な恰好をして、兩手を膝の上に置きながら、路の傍で、内部の行列の出て來るのを、もう一時間ばかりも目をしばたゝいて待つてゐた。

さうするうちに、アンゼラスの鐘がいくたびか高く朗らかに搖れながら鳴りひゞいた。とう〳〵一つの十字架が先頭に立つて、修道士達の行列が、庭の遲咲の八重櫻の中から、現はれてくるのを見た。

人々は動搖し、且つ制しつゝ路傍に退いて自分等が各々その行列に加はるべき順の來るのを待つた。修道士達の行列は、門のところで、信者が列に加はる間、たゆたひつゝ待つてゐたが、やがてしづ〳〵と動いて、高く聳えた山の聖窟へ、一筋の道を、長き帶の如く續いて行つた。その人々は二列になつてゐた。朝まだき信者の百姓たちは大勢はたらいて、その非常に長い道の兩側に、丈餘の朴の木や楢の木の枝を突き立てゝ、うるはしい綠の小路をつくつた。その澤山な木は、まだ夜の明けきらないうちから車で山や森から運ばれて來た。そしてその車を馬が何頭も曳いてゐた。信者の百姓達はそれを朝の八時までに、路傍に立ててまはつて、その仕事が終るや否や、行列が出たので、彼等は大いそぎで着物を更へ、その場から列に加はり、そしてそのうちの或者は直ちに汗の中から、讃めたゝへまつる聖歌をうたつて隨いて行つた。また婦たちも、この日路に花を撒くことでいそがしかつた。大きな瑞

瑞しい葉を持つた併しそれはたゞ青いばかりの樹が、男の手によつて、路の兩側に立てられてしまふと、婦たちはそこへ行つて、後から花を布いてあるいた。その花はもう前日から集められたのであつた。野や山や、また到るところその人々の家の庭に咲いてゐた花は、惜げもなくこの祭のために折り採られて、聖體を通す行列の道の上に、踏まれるべく順序よく撒かれ、隙もないほどに敷かれてあつた。はたらいて能きるだけのことをして謝恩するこの日の勞働は、どんなことをしても彼等には愉快であつた。

人々はその綠樹の間を、さうしてその花の上を過ぎて行つた。過ぎて行つたその跡には紅い花が、ひしやがれたまゝ陽に輝やいて痕をつけてゐるのが見られた。また前の方にも同じやうにつゞいてゐた。六人の紅い禮服を着た童貞が香爐をふりながら、ちやん〳〵と幽かな金具の音を立てゝ振りながらあるいた。紫の濃い煙はその香の薫りと共に左右に靡いて、うしろの行列に

及び、又流れて草原の上を這うて行つた。更にその後ろに隨うた何人かの童貞は、籠の中から多くの花や花瓣を、手を擧げてふり撒きふりまきしつゝ過ぎて行つた。是等の淨めの列を前にして聖體を入れた捧獻臺が靜かに行つた。その捧獻臺を手に持つてゐるのは德高きW――司祭であつた。その右に副司祭、左に助祭、また天蓋の傘はE修道士がさしかけてゐた。行列の人々は皆齊しく歌つた。修道士も信者も齊しく、くりかへし〳〵おほくの聖歌を、感謝と、ほめたゝへと、祈りの熱い歌を、絶えず、たとへ一分間たりとも休まずにうたつた。

德高き修院長も、そのとき行列の中央に居た。この人だけは多くの人々の中にゐてもすぐそれと誰の目にも見分けられるのであつた。長き袍衣を纏ひ、木履を穿ち、太き聲して、アドロテの詩句を唱ひつつ修院長はしづしづとあるかれた。

長い長い行列がつゞいた。或者は既に山の坂路の上にかゝり、或者はまだ野の末の方にあつた。前の方でうたふ聲は、波が遠くから寄せて來るやうに餘波を傳へ、末の方では、それを搖き返して應ずる波のやうにいろめきわたつた。道が屈折するたびに、或は聲が幽かになり、或は聲が近くなつて聞えて來た。

うらうらと日が照つた。うらうらと、そして暑かつた。谷の向うで山ばとが啼いてゐた。小鳥らは多分仰天して散らばつたのであらう。山鳩ばかりいつに變らぬ聲で、靜かにぽう〳〵と青天の谿間で啼いた。

暑いけれども女等は傘を翳すことが出來なかつた。眩しい面をして暑さをかこちさゞめき合ひながら、目と鼻と笑の聲と相交錯し、互の髪が觸り合つた。さうして、たゞうつらうつらと香につゝまれていつた。

聖體の大祝日のこの日は、羅馬に於ても盛んな行列がある筈であつた。ロ

ーマばかりではなかつた。世界の到る所でこの祭が行はれてゐる筈であつた。同じ時刻に同じ人の歡喜が叫ばれてゐるにちがひないと思はれた。

「聖母マリア」「イエズス・キリスト」「御子何々……」と記されて聖像を章にした幾流れの旗が、いろいろの色をした旗が、次ぎ次ぎに行つて驛て一處に集つたとき、先頭は落葉松と白樺とに圍まれた山腹の聖窟に着いて、既にそこで彌撒が始まつてゐた。聖體を入れた捧獻臺は中に運ばれ、修道士等は木履をぬいで窟に入り、左右に別れて並び跪づき、司祭は至高敬虔の態度を以て彌撒を執り行つた。すべての人はひざまづいて祈つた。盛んなる祈！

行列の末に列つた人々の群は聖窟の前に到ることが出來ずして山道の坂路に溢れ重なつてゐた。その横手は切立の崖のある深い壑であつた。その崖の上のところに大きな欵冬の葉が繁つてゐた。人々はその欵冬の葉をとつて、膝の下に敷いた。上には樹があつて樹の間から眞つ白い太陽の光線がこぼれ

落ちて、縞目をなした。その下に居る者はいくらか涼しかつた。樹蔭の外に洩れてゐる者は、山中の熱い日に照り付けられて、汗をいくたびも拭き〳〵して立つてゐた。

窟の天井からは、冷たい水の滴が、皺壁の間から滴つて落ちた。そのしづくは白衣の修道着に落ちて彈きもせず、毛衣の上の露と溜つた。

この盛んなる祈りの後、ふたゝび群集は動搖して列をつくり、山を下つて歸路につきはじめた。

山をくだるとき、前面の海峽が見わたされた。うつくしき海峽よ！　雲なく風なく、神韻縹渺としてそこに七つの岬がうかんでゐる。群集はその前面の海を見て、醉うて歡呼するやうに唱つた。

かくて聖體の大祝日の暑い正午頃に、歌行列はふたたび長い長い行列をつくつて下りはじめた。

三、奇　蹟

「ありがたいことにT様、奇蹟がございました。そのわけをどうぞきいて下さいませ。あの子はもう一月も足をわづらひまして、學校へもあがらず休みまして毎日ぶらぶらしてをりました。どうしたらよからう、もしこんなことで一生かたはになつてしまひましたらかあいさうでございます、またそれにも增して私たち親になりました不しあはせはどんなだらうと明けくれ話してをりましたのに、まあ、T様、聞いて下さいませ、あの子は立ちましてございます！　足が立ちましてございます……」

と言つて、或信者の百姓のおかみさんが手に持つた茶をすゝめるのも忘れて、茶色の修道服を纏うたT修道士を仰ぎ見た。

「もしやあの聖水が、かみさまのお奇蹟によりまして、あの子の病を癒して

下さるであらうかと、たゞ一つそのことが心の頼みとなりまして、夜の明けない前に、毎日毎日ルヽドの窟へまゐりまして、小さな甕に聖水を戴いてつけたら癒る、ありがたいと思つて、神様のお力にすがつて、お祈りして、怠らずつけねばならぬと、あの子にもよくよく申しつけ、日に三度痛む足に戴いてつけさせました。

お前もつらからう、わたしもつらいと申しまして親子あけくれ泣いてをりましたのに、どうでございませう、十日目の今日に、T様。わたくしが臺所に行つてをりますうち、あの子はひとりで、默つて、ぴよん〳〵と家のぐるりを三度あるいてまはりましたのでございますよ、(默)あの子もうれしくて、物が言へなかつたのでございませう、たゞ默つて、目に涙を溜めてあるきまはつてをつたのでございます。そして私にそれが見せたかつたのでございませう、臺所へはひつてまゐりまして、そこで何度も、とん〳〵と足ぶみして見せました。まあ　まあ、そのとき私は何と申してよろしうございませう、たゞ涙がさきだつばかりに、氣がそはそはして立つたり、坐つたり、膝であるいたりして、私までが。

主人がどんなによろこぶでございませうと思ひます。主人はまだ知らないのでございます。はい。ただいま畑に出てをります。今に歸つてまゐるでございませう。どんなに父親がよろこぶことでございませうか。ほんとにありがたいお奇蹟でございますよ。」

と言つて、その喜びに上氣して涙の傳ふ頰をいくたびも押し拭つた。

T修道士は「なるほど」とうなづいて熱心な碧い眼を相手の顏にそゝいで「それはまあ、結構でございましたね、大よろこびでございましたね、なるほど、わたしも見たいがあの子はどこにをります」と言つて覗くと、そのとき次の間から十二三歳になる男の子がにじり出して來て、土間の明りのさす

方に向いた。その顔と眼とには含羞と、驚きと信仰とに燃えた不思議な稚い靈魂が表はれてゐた。

「なるほど、なるほど、立てますね、これは、これは」と紅髯のTさんは呆れた樣子であつた。千九百二十年七月

信、望、愛の生活

私は今最も人間らしい人々の中で暮してゐる。さう言つたら、よいだらう。人間の生活らしくないところで何か考へたり爲たりしてゐるやうに、私の友だちは思つてゐる。それも無理がない。こゝはさういふやうに世間の趣と異つたところだから。世間の趣と異つてゐるけれども善い人は此處に居る。此處に居るやうな人々が世界にもつと多く居たら、世界は、もつと善くなるにちがひない。

誰でも此處へ來て、此處の生活を見て、一つの生きた教訓を得て世間へ歸つて行かないものはなからう。それは誰でも、自分等と全く懸け離れて交渉のありさうもない生活が見られるだらうと豫期して、來て見た實際の場合に

は、それと反對に自分と最も密接な生活が行はれてゐるからである。さうして世間の生活には、此處と較べて遙かに缺陷の多いことを認めないわけに行かないらしい。

天主のこと、信、望、愛の諸德――さういふことが此處の人々の心を占めてゐるのは言ふまでもないが、如何にして農場を整理し、今年は比倍の收穫を擧げ得べきか、牛種を改良し得べきか、製酪事業を發展せしめて、市場に良品を提供し得べきか、といふやうなことをも絶えず考へてゐるのである。報せの鐘が鳴ると聖堂に入つて、定めの時刻まで祈禱をし神を讃美する。そのほか普通學や、羅典語で哲學や神學やを勉强する。さういふ事が矛盾でも何でもない。否それがために此處では最も賢い生活が行はれてゐるのである。

千九百二十二年

トラピスト修道院にての我が春の日記

四月廿七日

草の芽が萠え、日に〳〵色を染め、鳥もいろ〳〵の鳥が鳴きだし、ストーヴは長い冬の煤が積つて焚かぬやうになり、頸卷や手套を去り、長靴も、雪のない今は無用の長物になつたが、トラピストの春はまだ、遲々としてゐる。

院長は園囿の中に林檎の栽培を今までよりも一層廣く企てゝ日々其事にかかつてゐられる。私はかねてからトラピストの野には鈴蘭が無いのを物足りなく思つてゐたので、札幌農園から二千芽の分讓を受け新に移植を試ることにした。これで失敗すれば又やつて見るつもりである。院長の爲る林檎の栽培のやうに實質を供給するものでなく、鈴蘭は、單に私の「詩」に過ぎない。

今日は曇り日で、南風が吹いて何となく氣分が悪い。午前の十時又は十一時過ぎ迄、教育上の務をしてくると、それでもう身體の方はひまだが、頭の中が休養してゐないので胃腸が弱くなり、感冒もひいたやうな氣がするので正午頃一時間ばかり眠つた。それから外へ出て小犬を揶揄つてゐると――この頃私は白い犬を一疋飼つてゐる――副院長と、羅典語の日本譯字引を作つてゐる司祭とが伴れ立つてそこへ來た。字引を作つてゐる司祭は、しばらく佛蘭西へ歸つてゐたが、四五日前にまたトラピストへ着いたので、今居る私の家は、以前此司祭が住んでゐたことがあつたから、這入つて來るとイキナリ見まはして懐かしさうにしてゐた。話の間に、あなたは年はいくつですか」と私が問ふと、「いくつに見えますか。」と言はれる、さあ、副院長よりは大分若さうですと、言ふと、ちよつとへんな面をせられたと思つたら副院長が傍から「あなたと三つちがひです。」と言ふ。おやおや三十六か。西洋人の齢は一寸わかりにくものだと思ふ。

羅典語の和譯字引をつくる爲にこの司祭は、一日十時間の勞働をしてゐる昨年佛蘭西へ歸國してゐるあひだも一室に籠つて夢中で仕事をして一週間も出て來なかつたことがあるのでそれからは、おつかさんが鍵を隱してしまつたといふ話だ。私は、羅典語の字引はまだ日本に一つも出來てゐないから日本には大に貢献して貰ふことになると言つたら、「いや、これはトラピストの爲に作つたので公教の學校にも使はせ度いと思つてゐるが日本のアカデミーへ出して日本の學士會がもう一度善くするのはいゝだらう。」と答へた。寂寞な、長い時期に渉る仕事に對して倦まない熱意と重荷とを持つてゐるそのこころもちが眉の間に動くやうに感じられた。N子が榮太郎の「梅ぼし」を進めると、それには困じられたらしく、半分は口へ入れて消却したが、半分の缺けの餡だけは手に持つてゐるうちに行く方知れずなつた。

もう日が暮れかけて來た。窓には波の音が響いてゐる。

廿九日

日朗かで鐘が響き、草青む岡の上に聲のよい雲雀轉つてゐるのを聽くと、プラウニングのピパの歌を想起し、世は靜かにして事もなく、すべての上を神が領してゐる幸を感じる。今日は聖ロベルの祝ひ日だ。シトー修道院の創立者であるこの聖人に就て傳記には一つの挿話を載せてゐる。聖ロベルが、まだ母の胎内に居つたときである。或雪のふる冬の夜、マリアが其母の夢にあらはれて、自分の約婚する者は汝の腹から出生する男の子であると言つた。そして目が覺めて見ると其母の指に美しい金の指環が欽められてあつた。

修練室で少し話した後、スピテさんを誘つて散歩に出かける。後ろの畑では今盛んに土を耕して馬鈴薯を植ゑてゐる。白い服を着た修道士は裾を襄げて、腹のところへ種薯を入れてふくらませてゐる。道からその働いてゐる畑

の中へ這入つてゆく。十人ばかり居る、「手傳ひに來ましたか。」と笑ひ〳〵。閉口してスピテさんと山の方へのぼつてゆく。途中スピテさんは、ふと突いてゐるステッキを日に翳すやうにして、「どらんなさい、ここを。」と言ふ。そのステッキに小さな穴があつて硝子玉が仕掛けてある。そこを覗くと穴から汽船が見える。春だ。春だ。

「ハヽ、それは私が馬耳塞から乘つて來た船なんですよ、硝子玉の背ろに寫眞が貼つてあるんです。」

こんなことをして笑ひながら、ゆつくり山路を上つて、ルヽドの洞窟まで來る。冬の間の雪嵐の爲に崖が崩れ落ちてゐる。このあたりの櫻はもう二三日で咲くだらう。それにしても清泉のほとりはまだ青葉が蔭するにいたらず窟の中に吹き寄せられた去年の落葉が、踏むとかさ〳〵音を立てる。

下りて食堂へ行き、ビールを飲む。春の散歩で渴いて、酒精の尠いトラピ

ストのビールを一ぱい飲むのは、ほんたうに宜い。

三十日

「きり〳〵ばつた」の作曲が出來たからと言つて、タルシスさんが來る。歌つて見るとおもしろい。譜へ詞を入れて「良友」へ送る。

子供の聲がするから出て見ると、菫を抱へて立つてゐる。そして其菫を呉れるといふ。二三日前であつた。小鉢に菫を移したりしてゐたことがあるので、それを見て居つて持つて來たにちがひない。どうも可愛い子供だ。禮を言つて歸すと、しばらくしてから又二三人の聲がした。後になつて氣がついたのだが下駄箱の上に、今度はもつと〳〵澤山な菫が置き去りにしてあつた。私は直ぐ鉢を持つて來て、その菫を花壇の何處に植ゑようかと思つて立つてゐた。花壇にはヒヤシンスやアネモネが既に美しい色をして咲いてゐた。

そこへN子が來た。落葉松の青い林で何の鳥かは知らぬが奇麗な聲で鳴いてゐた。

「あの鳥はミチコチヤンと言つて鳴きますよ。」

「そんな莫迦なことがあるものか」と私は言つた。

五月一日

聖母聖月に入る。これから私は忙しくなる。八月に一度上京したいと思つてゐるので、それまでに私自身の仕事のくゝりをつけておきたいのと、又今月は修道志願者が八人新入するといふから、其中の數人を加へて私は今より餘計に受持たなければならない。哲學はいよ〳〵スピテ靈父に決つた。羅典語は今まで通り高木靈父である。

荷物の事で農場監督のヒラリオさんに交渉する。鐘が鳴つたのでヒラリオさ

んと聖堂に入つてゆく。祈禱が三時に濟んで出ようとしてそこで履物を履いてゐると、ガブリエルさんが私を見つけて、「これから皆で散歩に出ようと思ひますが御一緒に。」と言つた。後園の櫻と林檎との間を行くと、早、あちらからもこちらからも白い服を着た連中がぽく〳〵と木履の音を立てゝ集つて來た。肩を並べて、ぞろ〳〵と青草の上を歩いて行つた。今日は日曜の午後であつたから、堅い重い樫の戸の中で默想に過すべき時を、心ゆくばかり自由の散歩に代へても差支へはないのであつた。空は青かつた。近いところの野は味覺的な綠いろをして、その向うは少し乳いろを帶びて、そのまた向うは水淺黄の海水だ。落葉松の中へ這入つてゆくと、淡紫の菫が一ぱい咲いてゐた。木履の踏み場がないほどであつた。誰かが落葉松の林は何處へ行つても菫を伴つてゐると話してゐた。

私は何心なく歩いてゐるうちに、草が五六寸伸びてゐる平らかな地で、雲雀の巣を踏み付けた。雲雀は非常に驚いて、すうつと前の方へ飛んで行つた。そこで一同が私の踏んづけたところへ集つて見ると、四つの小さい卵があつた。殼の上に黝色の美しい條を持つた四つの卵。それは草のはえてゐるところから二三寸許りも窪められた小さな草の室に置き並べてあつた。其上に柔かい小鳥の毛が覆せてあつたらしいが、散亂して、そこらの草の上に懸つてゐた。私は其小鳥の毛を元のところへかぶせて見ようとしたりした。一同が同じやうにその事を思うてゐるやうであつた。かくて程近い草叢の中で、四時ごろの霞むやうな日差を受けて金色の聲で鳴いてゐる鳥があつたのは、親雲雀であつただらう。

庭へ入つて來ると、手に鎌を持つて立つてゐる白い髯の大きな院長に會つた。その鎌はいたく鏽びて赤くなつてゐたから、「どうした鎌ですか。」と私は訊いて見た。院長は私にそれを示しながら「野に落ちてゐました」。一番大き

な事とそして一番小さな事とに心を用ひそれを自ら爲すところの聖院長よ。

五月三日

新道を莊の前に拓く。私の函のやうな家は小高い地帶に建つてゐて周圍に深い壑をめぐらしてゐる。隣は遠いけれども偷盜の惧はない。道は橋を越えてくるやうになつてゐる。新しい道が出來かゝつて見ると、このあたりは大變よくなる。道は大事なものだ。今、壑には木蓮の花が盛りだ。

五月四日

一望靑い一色の中を敏捷な私の小犬が跳びまはつてゐる。その向うをN子が歩いてゐる。菖蒲を採つてゐるのだ。四五人の娘さんが畑をしてゐるも見える。その中の二人ばかりは、何時でも其處に立つて鍬を持つたまま四邊を眺めてゐる。しばらくしてN子が娘さん達の方へあるいて行つて話をしてゐる。すると今度はその娘さん達も一緒になつて笑ひながら水澤の流れの方へゆくのが見える。多分菖蒲がそこに夥しく咲いてゐる筈だ。

棟梁が緣のところへ來て、提げて來た櫻の木を指して、口上で言ふには、

「この櫻の樹は院長樣のお土產で三本差上げます。一本の名は大關といひ他の二本は天の河といひますさうで。來年は松前から善い櫻の樹が來ますから其時はまたお分ちします」と。

佛蘭西人の院長（今は日本へ歸化してはゐるが）から、一本は大關といひ他の二本は天の河といふ歌のやうな和名を持つた櫻を贈られやうとは、ほんたうに思ひがけない。私は窃かに思うた、剛毅で聖熱に富んだ院長の一面には、日本人も及ばない、かういふ奥床しさがあるのだと。

棟梁は、私が明日植ゑて貰はうといふのを引取つて、

「なあに、これから日暮までに植ゑてしまひます。」といつて、私の好む場所を求めて、そこへ一間位宛の間隔をおいて土を掘り初めた。私もそこへ出て、それを眺めてゐた。

加賀谷の妻君は、私達が樹を植ゑてゐるところへ小走りにやつて來て、手に持つてゐる山櫻の一枝をN子に渡しつゝ、「今ほかから貰つたのですが半分お分けしますからお活け下さいまし。」と言つた。私も傍から禮を言ふ。

淡泊な山櫻の花は懷しみがある、新葉の美しいことは花にも勝る程に思ふ。

五月五日

基督御昇天の大祝日。面を洗はうと思つて厨へ出ると、大きな水甕に前の日の山櫻が一ぱい差し込んであつた。それから皿の上に五六尾の生きのよい小鯛が載つてゐて、やはり櫻のやうな紅い色をしてゐた。櫻鯛といふのはさうしたところからいふのだらう。何となく厨に詩を感じて、私は春の朝らしい氣分に涵りながら、ばしや〳〵水を使つた。

下の信者の聖堂では七時から歌彌撒が始つたが、上は九時半であつた。尖塔の二ところで鐘が青天に向つて鳴つてゐた。殊更今日は朗かに響いた。私はアレキシスの彈いてゐる風琴の近くに居て祝祭にあづかつた。この日の式服はそれ〴〵美しいものであつた。頂に十字架の標ある金の杖が蠟燭の燈火にきら〳〵するのもゆゝしかつた。大きな金具留のついてゐる祈禱本は、修道士の一人々々の前に重さうに開かれて豆ぐらゐの大きさがある朱い譜と黑い羅典文字とをのぞかせてゐた。司祭副助祭等は祭壇の前に並んで、三羽の神聖な鳥を見るやうに動いてゐた。他は二列に各々の祈禱席について聖歌を唱へた。又或は起ち或は跪き、或はめぐる、韻律的な慇懃な拜禮が行はれた。

そのとき視覺と聽覺とは一つになつた。堂内が不思議な匂を持つた交響樂

になつてゆくのが感じられた。歌の聲は元より恰も燻香のにほひも、花束も、空氣や光も、一つになつて唱つてゐるやうであつた。

外には何時までも春の日がうら〳〵してゐた。千九百二十一年五月

トラピストの夏

夏が來る。トラピストの夏を見ること四度びである。わけても今年は、此處に歳を越えて夏より夏に至つた。移りゆく風物は目にも心にも染む。五月は聖母聖月で、うら〳〵かな日が多く、森は香ばしくなり、若葉が水に蔭し、鳥の聲がそこ〳〵に散りぼひ、木の花が匂ふ。

櫻は杏と共に咲き、桃も時を同じうして咲く。林檎は稍遲れて六月が盛りである。桃はやはり本土で觀た方がよく、林檎の花ばかりは北國でなくては賞されないものである。

聖堂のわきに二三本リラの花がある。この花は佛蘭西から移され、十餘年を經て今その薫りを傳へる。リラは、六月より後、しばしば聖母の像の前に

捧げられる。こまかい花がむらがつて白に或は紫に咲き、殊に紫のリラは、聖母月の春をあらはすにふさはしい感じがある。夏咲く花として、他に目を惹くのは菖蒲である。菖蒲は碧色の花を著けて、水澤の畔りばかりでなく、野中に草にまじつて咲く。トラピストの野のやうに、この菖蒲のさくところを私は外に見たことがない。牧場に星のやうに點綴する苜蓿の白いこまかい花も、どこにも見られる花でありながら、數多く氈のやうになつてゐるのは美しい。露がまだその乾かない朝の散歩の木履の先きに濡れてかゝるのも涼しい心地がする。

牛や羊は、其處此處に群れてゐる。それらの家畜の數は百に近いだらう。物に怯えやすく感じ易い仔ひつじや犢が、多くの大きな牛羊の群にまじつてゐるのを遠くからながめるのは愛らしい。けれどもトラピストの野は、際涯ないほど廣くして、彼等の飼場もまたしば〳〵遠くに變へられるから、どこに出てゐるか、その影を見失ふことがある。

ポプラの林がある。果樹園がある。菜圃がある。道は至るところに通じてゐる、農場と製酪工場へ、林へ、海へ。青年が牧草を山ほど積んで、大きな聲で聖歌を歌ひながら馬車に乘つて、丘陵を越えてゆくやうな光景が、ときどき見られる。

牧草は熟れたり
燕麥も
頭重げに靡きたり
今日收穫にて刈らざるべからず
彼處の畑も
此處の畝も、

明日雨ならば惡からん、
さらば人々よ、働け、
日は熙々たり
氣は澄みたり。

長き冬は痕も見せず
野山には香り滿ち
季は今笑へり、
人の聲、家に無く
牛は遠き阜に伴れださる。
刈取の車輪は
高き空に響く、

刈れよ、刈れよ、
時は熟る、
明日若し雨ならばあしからん。

而して、收穫また播種に際しては、多く亞米利加風の大農法に依り、精鋭な器械を使ふ。プラオもリンチも二頭又は三頭の馬が引いてゆく。廣濶な野と空との間に、迅速に働いてゐる人と馬とが見え、時として麥浪の中から響ばかりが聞える。

信者の小作人は、夏の暑さでうるむ野に悉く出て、鍔の廣い麥稈帽子と白い襯衣とを着て働いてゐる。燕麥や牧草を刈たふしてしまつた後の仕事は、多くは修道士に委ねられてあつて、彼等修道士は、木製の三叉の長いホークを以て牧草や燕麥を攪拌して日に乾き易くし、既に乾き了つたものは、至る

ところに堆高く積み上げておく。
かくて時は黄昏になり、鐘は晩禱を告げ、修道士は並んで歸途に就き、羊
や牛もその戸舍に追はれてかへる。

晩の聖堂の鐘、鳴るころなれば
羊は羊づれとことこと歸り來るなり
芝岡の新しき徑に靄降り
戸舍までは、黄昏の柔かき光導けり。

牛飼の子供は遙かの野に
殘りの牛を追ひまはせり
夕榮もいとゞ暗く、一重一重へとぬぎて
黄金の光、幽けく流す。

晩の聖堂の鐘の音
戸舍にかへるか、かへらぬか、其間に
羊は羊づれ、列亂し、濡毛垂れ
杳けき果よりの光に、遊びつゝ鳴きけり。

千九百二十一年六月

七つの岬

T君

もう私がこゝへ來てから一月餘りになりました、早いものですね。併し東京の繁忙な生活の中に居ますと一月や二月は氣のつかぬうちにも過ぎてしまひますが旅に居ますと、季節の風物の移り更りが目に映り心に染みて、はつきりと、そして比較的長く感ずることが出來ます。殊に私はこの四月からこちら南と北とを燕のやうに送つて互に風土のちがつた地に居ましたところから一層季節に對する感じが深いのでせう。東京で花の散つたころ東北へ來て見ると花が盛りでした。松島や平泉に遊んで、津輕海峽を越えて北海道へ來て見ますと、花どころかまだ函館の町の日蔭などに雪が殘つてゐたのです。其

れ故私は北海道へ來て春に二度めぐりあひました。こちらの春は五月より六月初めにかけて梅も櫻もそのほかあらゆる春の花が一齊に開きます。眠つてゐた天地が急に目を開いて活動をはじめる其の鮮かさ、そのあわたゞしさ、鳥なども、内地とちがつて非常に多く住んでゐて、悅ばしさうに啼いてゐる聲は大變なものです。日本の中部では里ちかくに來る鳥と山に居る鳥とは別別ですが此處ではさうではありません。山の鳥も里の鳥も雜居して聲を放つてゐます。これは草花などについて見てもさうです、本土の中部では山に咲く花、高原にさく花が、こゝでは平地で咲いてゐるのです。

T君

かつこうといふ鳥はほんたうにおもしろい鳥ですね、あの鳥は全く都會にちかいところには居ません、靜閑な山ばかりを棲家としてゐます。「憂き我れを淋しがらせよ閑古鳥」といふ句が芭蕉にありましたね。あの鳥の聲を聞いてゐますと、全く世を離れたやうな閑寂味を味はせますが、めいるやうな沈んだ淋しさではなく、却てどこやら樂しいのどかな氣持を抱かせます、芭蕉も多分さうであつたでせう。芭蕉の言葉「淋しさに住めば淋しさを友とす」―これは淋しいことのみを言つたのではなく、寧ろ淋しい中にも心にゆとりある樂の情を言ひ表はしたものではないでせうか。

ウオルヅオルスにも、かつこうを歌つた一詩がありました、子供がかつこうの聲を眞似る涙の出るやうな純眞な、靜かな、調のよい詩です。私は此處へ來て、しみ〴〵とそのこころもちを解することが出來ました。この鳥は雨のふらないかぎりは、いつでも裏の林に啼いてゐます。裏林は落葉松です。その落葉松の間を雄と雌との閑古鳥が、たはむれて追つかけつこをしながらめぐつてゐることを見かけることがあります。啼く時は樹の梢にとまつて、身體の上半身を上下に動かしながら啼きます。杜鵑よりは大きい、鳩よりは小

さい細身の尾のぴんとした恰好のよい鳥です。それから山鳩もよく此處で啼いてゐます。山鳩の聲は閑古鳥のやうに休止點がなく、つゞけて息太くうたひます。どうしてあんなちつぽけな身體から全山に響音むやうなあんな太い聲がでるかと思ひます。たとへて言ひますと、閑古鳥は鼓を打つやうになき、山鳩は貝を吹くやうに聞えます。盛夏になるにしたがつてだん〳〵山へ隱れてゆきます。

T君

鈴蘭の花のさいてゐるのは實にうつくしいものです。五六月の一時期に天使園修道院の近くの野に一ぱい咲き群がります。鈴のやうなかたちを持つたこの白い花が綠草の間に千となく萬となく搖らいでゐる清淨なうるはしい光景を御想像下さい。野生の蘭科、百合科等の植物は、一體に種類も數も多くいろ〳〵めづらしいのが、野をあるいてゐると目につきます。紫の溪孫も或處に自然のままに叢生して居ます。

馬や羊のよろこんで食べるクローバの花、これは地の星のやうです。つれづれに四ツ葉のクローバを探して見たりします。四ツ葉のクローバを探し當てゝも贈る人とてありませんが。

T君。あなたはリラの花をご存知ですか。リラの花があります。この花は佛蘭西の花でよくあちらへ參つた人は此花のさくころをひどく懷かしがりますね。詩にもよく歌つてあるやうです。そのリラが北海道に咲いてゐるとは私も思ひませんでした。併しそれはこの修院で移植したのです。こゝの修道士達は前には佛蘭西の人が多かつたのですから。

ある日私は、聖母マリアの御像の前に紫の星のやうに團まつて咲いてゐる美しい花が捧げられてあるのを見ました。そのとき私はこの花の名を知りませんでした。たゞ見馴れないいかにもゆかしい花だと思ひました。それから

又の日に、私は私の好きなポプラの林の中の四阿へ來て讀書してゐますと、一人の親友が前日私の見たその紫の花を手にして近づいて來ました。

「この花ですか、この花はリラです」と言つて親友はその紫のリラを私の手の中においた。

T君。私の居る家の南に向いた窓から海がひろ〳〵と見わたされます。その眺めは津輕海峽の水道をよく見ることが出來ます。この海に岬が七つ見えます。私はこの高原の突出部の崖から全景を瞰望しませう。

左手の一番近くに出てゐる岬は葛登支の岬と云ひます。この修院へまゐりますには、船でこの岬を廻つて來るのです。この岬の突端に燈臺が一つあつて、夜は燈火を點じて海上を照明します。赤い崖の上に白い塔が立つてゐるのが見えます。その岬の向うに更にもう一つの岬が見える。あれが函館の陸軍要塞地です。津輕海峽の守備區域です。それから前面に青森方面の陸の突端が藍色を帶びて夏の靄の中に横はつてゐます。あの岬と北海道との間の海峽を青森から函館まで船で横ぎるには五時間かゝるのです。その右手に見える二つの岬は渡島の一部で、その向うに福山町（昔の松前）があります。夏も雪を戴いた雄偉な千間嶽がそこから窺いてゐます。また其外にも岬がありますが、私の記憶にある限りまだこのやうな大きな輝かしい風光を他に見たことがありません。私は美しい島嶼を持つた瀬戸内海が見える中國に生れましたが、人の心を無限の沈思に誘ふやうな、悠久の深海の光景を私は此處へ來て初めて見ました。羅馬から來た一人の修道士は、「羅馬よりも、こゝの景は尙美しい」と言つてゐました。何處も神樣の土地だ、しかしこのやうな美しい地に居るのは尙幸福だと感じて居た樣です。私も同感です。

T君。是れが私の第一信です。千九百二十年九月

トラピスト天使園の童貞

ある夏の暑い日に、私はAといふ大學生と一緒に、童貞女の居るトラピスト修道院を訪ねた。その修道院は、函館から東北へ二三里行つた湯の川といふ山村の後丘に立つてゐるのであつた。

初め、私は童貞女の修道院を訪ねるつもりではなかつた。私は男子の修道院の方へ行かうと思つてゐたので、東京を立つ前に手紙を、の方へ送つておいた。さうして、函館へ來た。折柄暑中休暇で歸省してゐる此土地の知合の青年が三人で、棧橋まで出迎へてゐてくれた。

私の乘つて來た船は比羅夫丸といふのであつた。青森から五時間かゝつた。朝七時に出て十二時に着いたのである。船は、汗ばんだそして黄ろい汽笛の

響を鳴らして、徐々に棧橋の方へと横に寄つて行つた。降船を待つ數多の乘客にまじつて私も甲板に立ち、新しい山河に接するめづらしい氣持で陸の方を眺めてゐた。軈て、梯子が下りて、人はその上をぞろ〳〵と橋の方へ降り初めた。その時私はその橋の上に鍔の廣い水浴の帽子を被つて袴を着けた三人の青年が、むかうでは早私を見つけて笑ひかけてゐるのを見た。

「よくいらつしやいました。私達は丁度この向うの岬の端れで水浴をやつて居りましたがあなたの電報を見まして慌てゝ此處へまゐつたのです。」

と其中のA君が、にこ〳〵しながら言つた。停車場の廣場へ出ると、向うの街角を電車が軋つてゆくのが見えた。その廣場で三人は立止つて對ひ合ひ私を何處へ案内したらよからうといふやうな相談を一寸して、それが決ると、電車に乘つて、やがて私はK――といふ宿屋へ案内された。宿屋では私を中學の教師とでも思つたらしい　三人の學生が隨いて來たものだから。

函館には用もなしするから、私はその日の内にも目的地へ行かうと思つて、A君等が歸つてしまつた後で、番頭を呼んで當別行の船を訊いて見ると、その船は、もう出てしまつた後で、翌朝でなくては乘れないといふことであつた。男子の修道院へ行くには、函館から更に當別行の汽船に乘ると都合がよいのであつた。

それでは明日の朝その船の出るまで待たねばならぬ。それにしても、此暑い午後を、たゞ一人宿屋の二階で送るのは、たまらないと思つてゐると、A君から電話がかゝつて來た。「參上しますが」と言ふ、「お出で下さい」と言つて切つた。此時思ひ付いたのは、湯の川の天使園である。あゝ彼處へ行つて來よう、晩までには歸れるであらうと思つた。そしてA君の來るのを待つて一緒に出かけた。

天使園といふのは、女子の修道院である。ローマ、カトリック教を奉ずる

ドラピスト修女院である。トラピスト（"Trappists"）といふ語は一つの修道會の名になつてゐる。元は佛蘭西のトラツプといふ地名から來た名だ。本修道院は佛蘭西にある。多くの修道會が在る中でもこのトラピスト會は最も嚴肅な方で、トラピストの修道院は世界の幾多の國に建てられてゐる。東方では支那に一つ、西伯利に一つ、そして日本には男子と女子と別々に二つ建つてゐる、何れも北海道の山林の中に在つて、餘り都會に近いところには無い。

（このごろ福岡に分院を設けるといふ企てがあるがまだ建設に至らない）。それは、このトラピストの目的とそれから歴史とが、俗世を避けて、不毛磽确の地を選んで、そこを開墾して修道するといふにあるからである。

日本のトラピストは、男子の方は今から二十二三年前（大正九年より數ふ）に佛蘭西から來た。女子の方は稍それよりも後年である。初めてトラピスト等が此國へ渡つて來たときは、今の修道院の所在地などは、全くの原生地で灌木、荆棘、野草が自然のまゝに生ひ茂つて、到底足を踏み入れることさへ出來なかつた。そこへ修道士等は、先づ地を卜して、大きな木の十字架を突き立てた。

聖堂が築かれるまでに、どれだけの辛苦が積まれたであらう。その年の冬は稀な嚴しい寒氣で、修道士が溪流で衣を濯いでゐると忽ち指の間が薄氷で閉ぢられて、衣は棒のやうに硬直してしまつたと聞く。一體、此地方は近年は、降雪の量も前のやうに多くはなくなり、陽氣もあたゝかになつたと人は言つてゐるが、人が住むやうになつて開墾も新にされてくると、宇宙の創造者全能之大天主ヤーヴェの御惠で天地の氣象も、和ぐものであらうか。

現在のトラピスト修道院は二つ共實に壯麗なものである。その園囿は三百八十町餘を擁してゐる。その園囿の中を二頭の馬が車を並べて通り得る路が通じてゐる。燕麥、大豆、馬鈴薯、萎々とした牧草地、其外美事な果樹林等

の地域は整然として區劃され、今や全く處女地時代の原始の面影はとゞめてゐない。何といふ大きな變化であり、また何といふ大きな力であらう。併しながら此力はたゞ偶然に表はれたものではない。天主の御惠とトラピスト達の信仰の精神とによつて成つたものである。私は玆で說明を簡單にするために彼等の聖典である聖ベネヂクト戒律の中の一節を引いておかう。

「若土地の必要上若くは荒蕪の爲に、自ら收穫に從事せざるべからずとするも、悲むに及ばず。蓋吾人の祖先及び使徒の如く、手業に從事して生活してこそ、眞に修道士とこそ謂べけれ。」

この戒律の文字通りのことをトラピスト達は實行してゐる、實に。

かやうに彼等は朝晩祈禱と勞働との生活をして倦まない。

天使園の方とても男子の修道院と異るところはない。私は途すがら靈場詣でをすべく、且は信仰篤き基督の花嫁たちを見たいと思ひ、A君と一緒に湯の川村を指して行つた。

函館から電車で溫泉のある湯の川村まで行つた。そしてそこで下りて山の方へと辿つた。だん〳〵と山の方へ、道は高くなつていつた。人家は見えずなり人の通ふのも稀になつた。白く乾いた山徑に靑葉の影の射してゐる片側をあるいてゆくと向うから女馬子が馬三頭ばかりを珠數繋ぎにして、鈴を鳴らし〳〵來るのに出會つた。北海道の馬は小さいと云ふことを聞いてゐたが、なるほど小さいものだと思つた。鈴の音がだんだん遠く微になつてゆくに隨つて、淋しさが一層深く感ぜられた。

もう建物が見えさうなものだと思つてゆくと、やがて幾重にもなつた丘の高いところに灰白い修道院の建物が隱見して來た。入口のところに塀が結つてあつたが、何とも文字は示されてゐない。

尙その門を入つて進むと坂を登るやうになる。その坂を登りかけてふと向

うを見ると、今しも、午後三時ごろの日の光を蒸すやうに受けた夏草の茂みの中に立つて、こちらを見てゐる二人の少女があつた。その少女の顏には少しばかりの驚きと羞恥との表情が表はれてゐた。彼女たちは二人とも同じやうに、黑い童貞衣を着け、白い覆り物をしてゐた。覆り物は肩から背の方まで垂らしてあつた。健康ではちきれるやうな肉體の線が着物に表はれてゐた。少女は長い間然うして夏草の中に居たのであらう。彼女たちは草を刈つてゐるのであつた。

私は不意の侵入者らしく思はれる自分等をいさゝか恥ぢる心地がしながら、案内を何處で乞うたら可いかといふことを叮嚀に尋ねた。すると、少女の一人は無言で片手を擧げて指でもつて一層後の高い處を差し示した。少女が私の問に對して言葉を發しなかつたのはトラピストの生活は平生沈默を以て行はれてゐるからであると思はれた。

客が道をまちがへず玄關へ進むかどうかを見とゞけるやうに目送してゐた二人の少女は、やがてこゝろもち上氣した顏を俯せて、また務のその手業に從つて草を刈り出した。

私達は一つの花園を横切つたが、その花園は實に美しかつた。整然と爽かに、あきらかに、劃られた花園の諸方から、道が遂に一つの所に達するやうに均齊的につけられてあつた。私は左の方から、A君は右の方から其道をのぼつて行つた。修道院の正面の扉は固く閉ざされてあつた。私は釦を押した。併しその響は内から聞えて來なかつた。私は再び押した。

私はその間、その高き地點から後を振返つて見ると、其時私の眼に映つた風景は何といふ不思議な風景であつただらう。蜿々と、幾重なりにも重なりあつた山々の向うに灰色の一つの海が靜に展けてゐた。その海の上には船一艘も泛んでゐず、また海岸に家らしきものも見えず、たゞ島か岬かゞその中

に突出てゐるばかりであつた。この原始的な、たゞ大きな自然の輪廓ばかりのやうな風景は、たしかに或宗教的の瞑想と信仰の情緒とを誘ひ出さずにはおかなかつた。私はホルマンハントが贖罪の羊を描いた死海の畫を想ひ出さずにゐられなかつた。此處はさほど荒涼とはしてゐないけれども、萬物の輝くこの夏の眞盛りの日に、何と打沈められたその沈靜な色よ！

軈て、音もなく扉が中から開いた。そしてそこから、焦茶色の羊毛の引摺るばかりの寬衣を着て、鍔のない帽子を被つて、山羊髯を少しばかり顎に持つてゐる年は四十ばかりの男の修道士があらはれた。

「あなた方はどういふ御用で。」

と、先づ慇懃に頭を下げたその修道士は問うた。

「私たちは旅の者で、これから當別へ參る途中ですが、暇を得て拜禮したいと思つて參りました。」

「それはようこそ。只今御聖堂に御案內致します。」

かう言つて、その修道士は快く靜に踵をかへして、內部へ私達を導き入れた。

內部。そこには漂つてゐる或香があつた。私は直ぐそれを嗅覺と心靈とに感じた。何と言つたらいゝか其にほひは、今が今まで吸つて來た外の空氣とは、まるきり、異つてゐた。天井は高かつた。壁は厚く床は重く、修道院の構造は堅固で落付いた安らかな氣もちを與へた。

「ちよつとお待ち下さい、神父樣にお告げしてまゐります。」

と云つて修道士は私達をそこへ置いて音もなく消えて行つた。その人は、稍青白い面をして、淋しい優しい微笑を湛へてゐる如何にも神僕といふ感じのする人であつた。天主の御惠にて後年、私は男子の修道院の方でこの人と邂逅した。M——と云つた。

その室と奥の室との間の壁に挿入してある一本の柱があつた。大きな、よく磨かれた柱である。が、よく見ると此柱は普通の柱とはちがつたところのあることに氣がついた。丁度その中部程のところは、抉りぬいて開かれるやうになつてゐるらしい條目がある。私たちは不思議に思つたので、M修道士が出て來たときに、まづその事を尋いて見た。するとMさんは、其柱の側へ寄つてかう言つて説明した。

「童貞さんは、いつも奥の方に居ますから、外へ何か用事のありますときは、此の柱を用ゐます。此の柱は廻るやうになつてゐるのです。そして中は空ろの箱になつてゐますからそこへ品物を入れたり、用事を紙片に書いたのを入れたりしてこちらへ出されます。またこちらからも同じ方法で物を送ります。それはかうします。」

Mさんは其柱に手を添へて中部程のところをくるりと廻した。すると、Mさんの言葉のやうに、向側に隠れてゐた柱の半面が、こちらへ廻つて來た。そしてその空ろの箱の中に私達は何か入つてゐるのを見た。私は刹那に、ある神祕的な感じが心に湧きくるのを覺えた。童貞達の一切の生活が、そこに象徴化されて、よくそれを覺ることが出來たやうに思はれた。私はそれ以上に童貞達を見なくてもよかつた。また見ない方がよかつた。こゝに私が觸れたもので、彼女達を了解する方が遙に優れてゐると思つた。

私達は聖堂に導かれて拜禮した。美しい聖母マリアの像よ、おんみの樣な美しい像は日本の何處にも私は見なかつた。また幼き耶蘇の基督よ、おんみはかくも心あつき數多の花嫁にかしづかれ給ふ。おんみはそれに値する。

拜禮の後に、私は堂の中を仔細に觀た。さうして廣くはないが、その色彩や意匠が非常によく出來てゐることを感じた。當別の修道院の聖堂は、もつと簡素である。併しこゝは流石女性だけに、柔かな感じが漂ふ。

ふりかへると、黑塗の木格子が祭壇との間に鉄めてある。その木格子のある向うは童貞女達が來つて拜禮し祈禱するところである。私の眼にこの木格子は深く印象してゐる。辭して門を出ると、折柄、祈禱の時の鐘が、高く、柔かに、夕暮の空氣を顫はせて響き出した。千九百二十年七月

修道院に於ける羅馬教皇使節

一

今、日本に居らるゝ教皇使節、攝政宮殿下が先年羅馬教皇を訪問された其答禮使並びに駐在使節として來朝され、無事に最初の任務を果され、慇懃なる交驩のあつたことは、世人の耳に新なることである。右マリ・オジアルヂニ師は、豫ねて御希望であつた默想生活に入るべく、炎暑と多繁なる用務の裡から、清凉と幽閑なるトラピスト修道院に移られ、目下その司教室にあつて靜な日を送つてゐられる。

二

使節が來られる十二日土曜の朝、私はいつもより早く目覺めて聖堂に行き、後、家に歸つて仕事の調べをしてゐると、副院長の使が來て、今朝九時半函館から船で見えるから、棧橋まで出迎へて貰ひたいといふことであつた。私はそこで朝飯を喫し身を淨めて支度をして出た。途中丘上より海を望み見ると、その靜なること砥の如くである。私は喜び溢れて心に歌つた。

天に喜びあり
海は波を起てず
あゝ教皇使節の船は到る
我がトラピスト修道院

船着場に行つて見ると、既に院長が來て立つて居られた。今度使節が來られるに就ても特別なる歡迎の準備はしない。それは非公式である上に、使節も曾てパピナピット修道會の修士であつた經歷を有し、一面に於て修道的境涯を望まれてゐたのであるから——。

三

私達は埠頭の突端に出でて船を待つた。はるかの沖を瞰み見ると、今しがた葛登支岬の左彼方から一條の煙を吐いて現はれてくる、鳩のやうに美しい二艘の汽船がある。特に教皇使節一行のみを乘せた鐵道院の靜丸である。船は徐々と灣に前み入つて棧橋に繫り、茲に教皇使節を迎へた。使節は玉のやうな溫容を有つてゐられる。身は餘り高くない方で、鼻が長く、髯がある。軟かな黑帽子を戴き微笑してゐられる。早坂善奈朗司祭及び、助修士一名を伴はる。二頭立の馬車で修道院へ向はれる。

これより先き修道院は、正門及び玄關を開き、そこに修道士一同參集して使節を迎へてゐた。かくて使節の馬車が丘上の路にかゝり、坦々たる一條の大道を院に向つて進んで來ると、鐘が二た處に鳴り、その鐘の音は久しく續いてゐた。

四

私は横から院内に入り、修道士の列に參列して、使節が聖堂に入らるるを待つてゐた。人々は玄關の廣間に圓形を成して繞り、靜肅を極めてゐる。時に一時少憩して祭服を附けられた使節は、衆の前に現はれて修道士等を三度び祝福せられる。かくて修道士の中からイイボ司祭出でて、使節を迎ふる言葉を凡そ二十分ばかり述べた。使節は不動の態度を以てそれを聽取し、イイボ司祭の言葉が終ると、非常に慇懃な、且つ愛に滿ちた態度を以て握手を求め、感謝をせられた。それから聖堂への行列があつた。先づ先頭には香爐を振る者が立ち、その後に、大蠟燭をさゝげた者が數人行き、歌隊讃頌の歌を朗唱しつゝ行く。使節は天蓋を以て覆はれて行かれた。かくてすべての修道士が聖堂に入り終ると器樂が鳴り、歌響き、堂上に鐘ゆらぎ、莊嚴なる式が行はれる。その時紫衣の大司教は、祭壇の前に跪いて居られたが、立つてその式壇を上り、高き聲して歌の祈禱を誦へられる。修道士もこれに和して歌ふ。

かくて師は聖堂を退かれたから、私は修練室に入り、私の修練者等と此日の喜びを交し、後また、聖堂に入つて感謝の祈をささげて出る。

五

八月十五日は聖母マリア被昇天の大祝日であつたから、一般信者の拜禮堂

なる下の聖堂に於て、教皇使節が彌撒聖祭を擧げられた。人々は參集し、異教者も交つて堂に溢れてゐた。大司教の彌撒を立てられるのは精神深くして神聖の感がある。聖體を享る者が數十人あつた。後で、日本人司祭中の傑士早坂祕書が立つて「聖父と聖子と聖靈の御名によりて亞孟」と誦へて十字架の印をして說教を始められた。天主の聖旨に支配せらるゝことを常に望み、德を樹てゝ世の人々にも施すべしと說く、さすがは切實なるところ、言葉にも態度にも見ゆ。

聖堂を出でて歸る途すがら、早坂善奈朗師が私を教皇使節に紹介する。使節は早坂及びビヤニツク師の紹介せられる言葉を聽き取られ、非常に柔和なる態度を以て握手さる。後、モニカも紹介さる。

天候は暑くてうるはしい。青空に光が滿ち輝いて、圓頂塔の屋根に日がきらきらと輝いてゐる。

六

月の第三日曜卽ち今日は、聖ペルナルド大修院長博士を記念する日である。本院聖堂より行列があり、後ち同聖堂に於て大司教の彌撒、特に聖ペルナルド祝日のため。入祭文、キリエレイソン、グローリヤ等の歌を誦ふ。千九百二十二年八月

北窓雑記

思索と讀書

樺太へ行つたり、新潟や秋田を旅行したり、東京から東海道線一部をを徒歩連絡で、大阪や神戸へ行つたりした、其年の暮から春へかけて、私は讀書と思索との日を送る。トマス・ア・ケンピスや聖ベネヂクトが私の友である。

秋の暮には、靜な鳥の聲が散らばうて、だん〳〵幽になる。山の楓樹が紅くなつて渓間にかぶさつてゐる。

晩暉の入るころ、天に黄金の波瀾を描いてゐるのは、いつも觀る景色とは言へ莊嚴極りない。平靜と幸福と神祕との混交を感じるのは、夕暮の日沒の美しい空に對する時だ。

當別のトラピスト修道院の在る土地は廣大な高原で變化の多い所で、此處に居ると飽くことを知らない。

自然といふものは形ばかりでない、氣象の變化が有つておもしろい。氣象の變化が無ければ、いくら善い景色でも、嫌りない節がある。

月夜

月夜、ひろ〳〵とした空を見てゐるのは何とも言へずよい。三つ星といふ星は、中天から絲で下げたやうに見える事がある星である。その傍に綺麗な星が一つある。北斗七星が蒼々たる空に燦爛としてゐるのは心を牽く。また明けの星は、早く空を周ぐつて行つて明方でないと見られぬ。

昨日も今日も好い月だ。昨日は久し振りの靜な日であつたが、宵になつてから月が出て、そこら邊りに影をつけた。私は、もう斯ういふ美しい月は見られまいと思つてゐたところが、今日になつて――十五夜になつて、ゆうべよりも善い月を見る。

まだ幾らか晝のあかりがまじつてゐる夕の空氣の中に、丸い、實に丸い滿月が、澄み切つた空に、かゝげられたやうに昇つてゐた、丁度その前の落葉松の杜の丘が赤黄と黝色とを呈してゐる上に、そして後方の半島の上に。海の色は此時藍綠のやうであつた。その上に灯が幾つかあつて、チラ〳〵と光つてゐる。其いくつかの灯は漁船である。

もはや晩になつた。

葡萄畑

A――といふ修道士が葡萄畑を耕して歸るのに會つて一寸話をした。はたらきにも色々あるが、葡萄畑を耕すといふことに興味を感じた。葡萄畑の譬

が聖書に有るからである。

高原と信仰

高原の氣分の多い冬の或日。私は、ある坂路を私の家の方へと登つて來た。ふと目に留つた一つの樹がある。其樹は何の木であるか知らない。葉の無い枝を差交してゐる。かなり大きい樹で、銀色の空を背景に立つてゐるのが私の眼を惹いた。私は坂の中途に止まつて、しばらく瞻視した。そのとき私の心に一つの思念が浮んだ。それはセガンチニの描いた高原の樹に一人の女性が居る畫面であつた。非常に神祕的な畫家の思惟を表はしたものであつた。今見る樹が如何にも、よく、其畫かれた樹に似通つてゐるのだつた。

圓頂塔の聖堂が、遙か向うの高原にその半分の形を抽き出て、山と雲と木とが見える。

高原の美と信仰とを私は感じる。

雨をよぶ燕

雨燕といふ燕が、群をなして空を飛ぶと、きつと雨が降ると言つてゐる。私は或日、ふと空を仰いだとき、實に數へきれない程多くの燕が、しかも一所に高き空に飛び舞うてゐるのを、庭園の上にながめた。驚いた。燕はたゞ輕快なものとばかり思つてゐたのに。

クリスマス

クリスマスの頃には、さすが田舍でも、子供達の餘興などがある。

聖堂には此時、特別に、厩の秣の桶の幼き耶蘇を、形に拵へて置く。夜の十一時頃から此日の彌撒と祈禱とが行はれるが、その時刻に到るまでの二三

時間を別の建物で、信者が集つて餘興を見る。

それから雪明りをひろつて外に出る氣持など、北國らしい。

事變を聞きて

罹災地に親戚の四五軒もある私達は、早くから東京へ行きたいと思つてゐたのであるが、なか〳〵入れさうになかつた。震災當日の私の日記などを見ても、北海道では至つて平穏であつたから、さういふ大きな事變が關東一圓に起つてゐやうとは思はれなかつた。然るに二日になつて、夜遅く歸つて來た牛乳車が傳へて、東京に大事變のあつたことが分つた。詳細な事は三日になつて分つた。初め新聞に載つて報道せられた記事は飛行機上から偵察したものを發表したので、其大袈裟なことは到底お話にならなかつた。けれども其大袈裟と言つても今から思ふと大差がなかつた。空中から見たところ、燒滅した區域は東京の三分の二、又は半分と言はれ、又死者は三十五萬位ある見込と報ぜられた。又横濱は陷沒したやうで伊豆大島も見えぬ、といふ廣大なる報道であつた。後、飛行機は、東京の空を飛ぶ事が不可能と言はれた。頻々として來る新聞の報知と、遭難者からの話とによつて、綜合的にいろいろのことがわかつた。函館、札幌、小樽等の新聞社は、あらゆる其機關を擧げて其報道等の爲に働いてゐた。各地の救護團が續々東京に行つた。私は思を驅らすばかりであつた。

やう〳〵落付いて行けるやうになつてから私と妻とは出發した。その前、親族の無事なことが分つた。出發に當つて、大風雨があつたが、その中を出かけた。併し豫定した船が見えない。それで陸廻りで函館へ行く乘合自動車を待つたが、人が言ふには、自動車は滿員との事でお待ちになつても乘れますまいとのことであつた。四里の路を歩るくことは能きないから、考へて、

荷馬車を傭うて行くことになつた。五圓を支拂うて買ひ切つた。ところが其處に一人立つてゐる女があつた。その人は、やはり船で函館へ行くつもりで此處まで來たのであるが、其船が出ないために困り切つてゐたから、私たちの馬車へ同乘させた。

馬はなか〳〵よく走つた。私達には此方が自動車よりも善かつた。第一沿道が甚だ趣味があつた。山道が迂路して、山を旋つて行く。その間、杉の大きな、よい林が青く連つて居り、その向うに低く海の一部が見えたり或は山のかげの方になつたりした。ところが思ひがけない事があつた。私達の行く前方に當つて、一臺の乘合自動車が、道の上に故障を起したらしく立止つてゐた。後から今一臺來た自動車が、これも如何した彈みか、同じやうに少時止まつて修繕して居る。恰も紅葉の頃で、山の楓が非常に美しかつた。山で觀るもみぢは、庭で觀るもみぢよりも一層趣の深い物であつた。又その間に黃ろい葉もまじつてゐた。太陽が此時、黃金の空の中にあつた。その壯大さは鳥渡口には言はれないほどである。詩を感じながら行く。

同乘させた女は、喜んで、土產にと持つて來た大束の鰯を、禮にと言つて、私達に東京へ持つて行つてくれと云つたが、斷つて、上磯まで來て別れた。

三週間餘りの旅行を終へ、函館から當別丸に乘ると、一人の若い船員が、慇懃に私と妻とへ禮を言つた。それは、その前、同乘せしめた女の夫であるあつた。

途中

東京から大阪神戸へ行くには、東海道線に依る方がよいが、何れも途中に故障があつた。東海道線では二ケ所、馬入川と、箱根隧道の山北と駿河との

間とが汽車が通じなくて十町、又は十七八町を徒歩で連絡しなければならなかつた。岡山から上つて居る衞生看護婦が十人ばかり同乘したが、其一人が體が利けなくて、人夫に負はれて越えたりした。一つの列車は凡そ一千人ばかりの人々を乘せてゐた。徒歩連絡をするトンネルに入る時、一人の背の高い男が、子供を負うて線路の暗闇を、やう〳〵燃ゆる瓦斯の火に照らされてあるいてゆく、その前を、七つ八つばかりのと十二位の子供とが勵まし合ひながら行つた、それもその人の子である。さういふ有樣を見て、昔のロトの一族かと思はるゝやうな感じが伴つた。

又大阪から東京へ歸る時、既に大阪から汽車に乘込んだ時からして、少しの席もなかつたので、私は或席の肱掛に靠れて、通路に立つてゐた。二等室の中は、少しの餘地も無かつた。後から後からと乘つて、そして體と體とがくつ付いて身動きも出來ぬやうであつた。此中にあつて差向ひにゐた一人の技師が、私と知合ひになつて、車中の苦を一緒にしたのは何とも言へず情味があつた。又横にしやがみ込んでゐる素朴な商人が、籠をすゝめて、そこへ私が坐るようにと言つて呉れたりした。技師へは、空氣枕を與へ、私も亦厚意を示して慰めることを得た。足は全く釘付けられたのと同じやうに動かすことが容易に出來難い中にあつて、此三人は、溫い心で一晩中を眠らずに送つたことを今に忘れない。

當別から

この北海地方でヤマセと稱んでゐる東南風が一夜吹き募つた翌くる日。目を覺して見ると、昨日まで眞つ白に積つてゐた雪は、殆ど痕かたもないやうに消えてゐた。部屋の中から、堅く鎖した二重硝子の窓を隔てゝ高原を見ると、丘陵も、その上の落葉松の林も、黄褐の色を表して、その上に、しつとりと雨が降り濺いでゐた。十二月も廿日餘りにもなつた今日、此國で雪が消えてしまふとは、何といふ思ひがけない出來事であらう。

私は、尙よく注意して、家の周圍をしらべて見た。すると家の入口や、窓の下一面に、夏から秋へかけて咲き盛つてゐた松葉牡丹の細いみだれた莖が、そこに赤黄の色を呈して、黑い土と共にあらはれてゐた。それから松と杉と

は常綠樹で、健げに青々して、全く雪を跳ねのけてゐるのが目にとまつた。花壇には、何かしらまだ春秋の名殘をとゞめた草花の葉の青いのが、哀れにしほたれて立つてゐるのが見られた。苺のつるも、葉も、堅く地にしがみ著いてあらはれてゐた。――この苺は五月、東京から移つてくるとき、雜司ケ谷の庭にあつたのを、他の草花といつしよに木函に入れて來たのである。試みに移植して見ると、軈て時を經て五坪ばかりにも繁殖した。今は來年の結實期のために肥料を入れたり、藁を敷いたりしてある。そのほか畑の野菜もあを〳〵と鮮綠を呈してゐるのはめづらしい。一夜に冬は何處へか行つてしまつたやうだ。朝のうちは、それでもいくらか其處此處の窪みや、陰に、斑らな雪が殘つてゐたものであるが、午後にはもうどこにも、この高原に雪を見る事が出來なくなつてしまつた。

この現象は全くヤマセによつて起るものと見える。ヤマセとはどういふ起原を持つた語か分らないが、多分「病セル」の轉訛だらうと思ふ。この風にあたると大抵の者は身體のどこかに變調を來たしてしまふ。即ちこの風は一旦吹きだして三日も四日もやまないことがあると、此地方に住む人達を、ふな〳〵に病せるから、それで此語が起つたのだらう。私も春から大分この風のキ、メを感じたが、最早馴れるに隨つてそれほどでもないやうになつた。東京では五六月頃、よくこの東南風が、佃島や月島の方から吹き上つて來た。雜司ケ谷や池袋のやうな、ずつと引込んだ山の手の方に居ても、時として、あの生溫かい風が吹きめぐつたあとで、木の葉などが鹽つぱくなつて萎れてゐたりするやうなことがあつた。萎れるのは草木ばかりでなく、人間もその影響を感ぜずにはゐられない。東京で吹くあの東南風は、外房州あたりでは尙一層ひどいやうだ。さうして太平洋から津輕海峽を掠めて遠くを吹き上つてくるヤマセは外房州よりも、或はもつとひどいかもしれない。

雪がふりだしたのは十二月の五六日ごろであつた。それから降つたり歇んだりで、時には、快晴の空を見上げることもあつたりしたが、併し雪は少しも地から消えずにゐた。人は會ふ毎に、「今度の雪は消えずにかたまるでせう」と言つて挨拶してゐた。或ところでは、雪はもうかたまりかけてゐた。踏むとさく〳〵して、雪底では、薄氷の裂けるやうな微かな音が鳴りわたつた。或ところでは靴が一尺も埋れるところがあつた。さういふところを歩くには、よほど注意しなければならなかつた。なぜかと言ふと、其下には澤があつたり藪があつたり、或は道を横切つて流れる雪の下の細流があつたりするから。

雪の下の細流――それは微妙な音を立てゝゆく。その音をきくと思はず立停らずにはゐられない。默々として一望雪ばかりの野をあるいてゐる人は、不意に、非常に滑らかな、何と言つていゝか譬へやうのない、可愛らしい響が歌のやうに、地の底から湧いてくるのを聞いて、誰でもわく〳〵するやうな慨悅を感ずる。何だかもう春が、そこに通ひ初めてゐるのではないかといふやうな氣がする。雪と水との景情は「なが〳〵と川は一筋や雪の原」といふ凡兆の句にすぐれて表はされてゐるが、此處にはなが〳〵と繪のやうに流れてゆく水はない。雪の下を潛つて、微かに〳〵音を立てる谿の水である。私はあの水の音に聞き恍れる。水は、私の草舍から一旦坂を下りて、また聖堂の方へ一つの坂を上るやうになつてゐる道の中途にある。或朝私は、いつもの通りそこを通りかゝると見馴れない物が、雪を以て覆はれた澤の上に置かれてあるのを見た。木箱でその木箱の下には、青竹で作つたらしい弓が當てがはれてあつた。私はおもしろいものだ何だらうと初めは不思議に思つたが、やがて颯落しにちがひないと思つて立停つて見てゐた。どこかの子供が懸けておいたので、かうして罠に入るのを待ち受けてゐるのだ。鼬の道は定つてゐるといふから、このさゝやかな水の流れるほとりは、あの敏捷い茶色の獸

の往來するところであるかも知れない。私は幾日も、氣をつけて見たが、鼬は一度もかゝつてゐなかつた。さうしてその小さな木箱の上に吹雪がして白く積つてゐた。暦巣がときゞ其處へ來て鳴いた。

近所の百姓は暇があれば、鐵砲を擔いで兎や、貉を山へ打ちに行つた。兎や貉の値は甚だよかつた。貉の毛皮などは十四五圓もした。百姓は時として二頭も三頭も獲物を肩にして歸つて來ることがあつた。又終日打ち廻つても一匹も取れないことがあつた。さうすると其夜は獸の道筋などをろくゝ眠らずに考へてゐて、夜が明けると早くから鐵砲を擔いで又山へ出かけて行つたりした。

私は九月の中頃から、中國の鄕里へ歸つて、神戸と、大阪と、東京とに三ケ月ばかり過してゐた。それで、今年は北海道の秋は全く見ないでしまつた。B靈父が、「一年の内で一番美しい時を御覽なさい、」と言つてゐた時期に私は病んで本鄕の順天堂に入つてゐた。退院してふたゝび渡道する時分は東京でも重着しなければならぬほど寒くなつてゐた。私は義姉のY子と、姪のU子とに挾まれて、病後の身を外套にくるみながら自動車で夜の上野に向つた、さうしてそこで見送りに來合せてくれたS君や、K君や、N君や、O君などと談笑して汽車に乘つた。「これからは雪だね。どんなに寒いだらう」「津輕海峽で吹雪に遭はぬやうにしたまへ。」といふやうな溫かい友情の言葉をきゝつつ。

發車してから間もなく私は寢臺の上で眠りかけてゐると列車ボーイに起された。「お預りする大事なお荷物はございませんか」「ない」「これは――新聞紙包みのこれは、お花のやうでございますね、こゝには、スチームが通つて居りますから、物置の方へお入れいたしませう。」

私は少し身體を上げてそちらを見た。O君が贈つてくれた花を新聞紙で圍

うたまゝ、寢臺のわきに置いて臥たところが、丁度そこにスチームが通つてゐたので暖氣が、その清高な香りを放つ白菊の花瓣に觸れてゐるのであつた。私はうと〳〵してボーイに謝しつゝ眠つてしまつた。翌朝、目が覺めると汽車は既に宮城野を駛走してゐた。車窓から外を見ると一面に白い霜が置いて、朝曦が昇つて居る。私は、いよ〳〵冬の北國へ來たなと思ひつゝ、「宮城野のあかきもみぢにおく霜の」と口誦んで見たが、何だか月並の歌か新體詩の口調のやうな氣がしたので、この感傷的なきもちを、ぐつと呑みこんでしまつた。

盛岡あたりは、何處にも斑らに雪があつた。かの岩手山は東北の富士で、雪をかぶつてゐるのが高大な氣象を表はしてゐてよかつた。此岩手山の見える間、啄木のことなど思ひながら過ぎた。

若し海峽が荒れるやうなら、青森でゆつくりしようと考へてゐた。ところが、青森へ着いて見ると、海上は豫想の外に靜穩であつた。十二月から翌年の春にかけては、此邊の海は殊の外荒れるやうに聞いてゐる。其數日前暴風を食つて海峽に一晝夜漂つてゐたといふ田村丸は、今沖合に煙を吐いて私たちの乘船を待つてゐる。青森驛のプラットホームには、「今度御乘船の方は、急行券をお求め願ひます」と書いた赤い札が掛けられてある。

「田村丸は急行ですか」と驛員にきくと、「さうです」と言ふ。

「急行で、時間はどれくらゐです。」

「函館まで四時間半。」と答へて、「時間は普通で三十分の相異ですが船の設備が田村は宜しいので……」と驛員はつけ足した。鐵道院は船の設備の良いことに急行料金をかけて、乘客の數の調節を計つてゐると見える。

二等船室には五十歳ばかりの陸軍將校と、新聞記者らしい三四人の一團があつた。將校は、萬葉集を註釋した一冊の本を持つてゐて、讀みにくさうに、

その歌をよみ上げ〳〵して、眼鏡越しに相手の面を見ながら、その歌を感嘆したり、註によつて語義を説いたりした。青年の新聞記者は、畏まつて應酬してゐたが、談が偶々、そこから新しいこの頃の歌に及んで行つた。すると、青年の新聞記者は、熱つた面に金縁眼鏡を光らせつゝ、「此ごろの歌は、たとへば、かういふやうなことを歌ひます」と言つて、「とある日に、酒を呑みたくてならぬごとく、今日われ切に金を欲せり」と吟じた。

將校は、

「何、今日われ切に金を欲せり……か、ハ、、、、」と嗤つた。

「まだ、かういふのがあります。」と青年の新聞記者は一層聲をはり上げて、

はたらけど
はたらけどなほわが生活、楽にならざり、
ぢつと手を見る。

と、一句々々に力を入れて、誰が聞いてもその船室に居るほどのものは誰でもわかるやうな高聲でうたつた。

そのとき、私はフイとそちらを見た。そして我知らず下を向いてしまつた。

將校は、「なに、もう一遍……」と言つて、「ぢつと手を見る、ぢや？　ふむ。」と言つた。悒としたらしかつた。なるほど啄木の歌には、あゝいふ悒とさせるところがあるな、と私は思つた。

青年の新聞記者が、この頃の歌として披露したのは皆、啄木の歌ばかりであつた。作者は誰だとも言はなかつた。かういふ歌が新しいのだと言つて説明した。その説明には嘲笑の色があつた。老いたる將校は無意味な笑を洩したが、やはり萬葉集がよいらしかつた。

併し私は心に思うた。あの男は嘲笑はするが、嘲笑はしても能くあんなに歌の數を覚えてゐたものだと。よくあんなに覚えて、しかも淀みなく、ひと

りでに出てくるやうに歌はれたものだと。して見ると、あの男は、それだけあれらの歌に動かされてゐるのかもしれない。多分あの男は、あの男の扈從してゐる、萬葉集の言葉遣ひにわけて感興を寄せてゐるらしい陸軍將校の意を迎へるために、自信のない嘲りの態度を見せてゐるのであらうと、さう私は思つた。

啄木は、この津輕海峽を愛して、初めには海峽の名を標題にした詩集を出す豫告まで何かに掲げたことがあつた。不平滿々で、覇氣のあつた青年啄木が、この甲板の上で、ぶらついてゐたのだがと思ひつゝ、ふと船窓を覗くと、潮騷がして、船は函館の防波堤近くになつてゐた。

その夜は、函館の旅舍に一泊して、翌朝私は更に、當別丸といふ小蒸汽船に搭乘して當別――トラピスト修院の在る村――に着いた。そして其朝打つた私の電報によつて來た修道院の馬車に會つた。私は、まつすぐに聖堂に入り、聖堂を出てから後、院長に面會して、直ぐに引取つた。

その日は蕭やかな寒い冬の雨が、しと〳〵と降つてゐた。私は外套の襟を立てながら、私の草舍に向つて、久振りの徑を辿つて行つた。すると丘陵のわきの木函のやうな私の家の屋根から、ストーブの煙が、淡く立つてゐるのが見られた。草舍の横手には、薪が、二所に堆高く積まれてあつた。――「二シキ買入れました。東京の小さな薪屋ほどあります。」と云ふN子からの手紙の一節が思ひ出された。二シキといふのは二車以上である。二車以上の薪をかうして長い冬の爲めに用意しておくのであつた。

私は高原を見わたしながら、あらゆるものに冬の脅威を見た。人間が冬の寒さを避けて暖くしようとしてゐることを、當別へ着いて、殊更切實に感じた。私は見馴れない黑い煖爐が据ゑつけられて、赤い火をとろ〳〵燃やしてゐる前の椅子に、ぐあひよくかけ、また、取替へられた海老色の窓帷に觸れ

て見たりして、この長い長い冬を如何にして過すべきかと心に考へたりした。

そこへ、副院長、B靈父、T修道士など、溫顏で優雅な佛蘭西人や和蘭人の友達がつめかけ、「當別の寒さは格別でせう」などと日本語で話す。私は林檎や菓子を薦めたりしつゝ久振りで、ゆつくりとしたきもちを味つた。

しばらく病後を養ふやうな狀態で暮す一方に、私は自分の內面の生活を見つめてゐた。自分を建て替へ、改めることを急いでゐた。それは要するに自分に歸ることであると思はれた。

私はローマカトリックの敎理に就て、尙よく勉强したいと思つてゐた。さうして私はこの考を立てると直ぐにそれにかゝつた。私はうら枯の數日、自分の居間をちつとも出ずに居た。ストーブの火を增し加へながら、私はヤコブ・リンデンの書に吸ひ付けられてゐた。

そのうちに、灰色の雲が層つて、毎日々々雪が降つた。忽ちのうちに大きな高原を埋め盡した。私はその頃から外を出歩きまはるやうになつた。膝に近くまでもある靴を穿いて、雪の上を歩いてゆくのはきもちがよかつた。暖い防寒用の帽子をかぶつて外套の襟を深く立て、手袋をつけ橇に乘つて、一二里の所など平氣で行つたり來たりした。橇は鈴の音をりん〳〵と立てゝ、どこまでもどこまでも滑走して行つた。道で別の橇と會ふと烈しく鈴を鳴し合つた。

私はもう冬の高原の生活に馴れてしまつたらしい。私の健康は恢復し、喜びと自由とを生活に感じてゐる。

昨夜からヤマセが吹いてゐる。烈しい人の心を奪ふやうなヤマセだ。さしも眞つ白に埋め盡した雪も、いつのまにか、その生溫い風に融け去つて、あとかたもなくなつた。もう消える時がなくかたまるであらうと、何度も思は

れた雪は、一夜にしてどこへか持ち去られてしまつた。

橇の影もなく、橇の鈴の音も聞えない。

私は窓に、しつきりなしに滴つて點を描く雨の粒を見ながら、この灰色の天候の下に坐して、自然の變化の一様でない現象に驚いてゐる。千九百二十年十二月

トラピスト修道院より

一

いつになつても心配が胸に殘る。苦い〳〵澱のやうなものだ。心の中に天地を求め安住せねば駄目の事、其れを何度感じてもキヽメのない大馬鹿者、ステツキを振り〳〵函館の町を今日もあるいてゐる自分を憐れんだ。

今日修道院から當別丸といふ船に乘込んで甲板の屋根の上に、二年越しの古帽子をかぶつて蹲まつてゐた。船が函館へ着くと僕は體に熱の有ることを知つてゐた。病院は午後は診察して呉れなかつた。二度僕は函館病院をたづねた。夜間ではあるが明朝早く修院へ歸りたいので診察して貰ひたいと思つた。けれども醫員は百二三十名の入院患者を受持つてゐるといふので一人の

患者の事は構つて呉れなかつた。門を出ると祭で混雜してゐる。悠々と其中にまじつてあるく。お神樂があり花車が通る。函館は內地の植民地で、函館タイプと云ふものはない。そんな顏の人間が騷然たる音樂をつくる。贅澤が錢だと思つてゐるので其麼贅澤はなか〳〵やる。

石川啄木の墓をやつとのことで探し當てた。それは市街をはるか離れたところにある。立待岬と云うた。函館の背面で寂寥を極めた海濱だ。もう來ることもあるまいと思つたので日は暮れさうだが急いで行つた。

何と、墓は墓標が一本きりだ。

此處には故人の四人の家族がみんな埋められてゐる。妻君も子供も相憐れみ相助け、しかも不平などは抱かぬように一本の墓標の上に其痕をとゞめてゐる。僕の踏んでゐる前には彼が居る。その彼を何と形容していゝか。僕は彼の顏を出來るだけ思ひうかべた。けれども其彼は今自分に向つて語る彼ではない。

相憐れみ相助け、夫人も子供も地藏のやうに感應する。僕は其等の家族を顧みて思はぬ譯には行かない。花筒は僅かに一つあるけれども用をなすべくもないから僕は持つて來た花束を其墓標の周圍に立てかけた。その花がせめて此寂しさを慰めた。

墓標のある前は路で、其下は海だ。その海は荒く遠い。

ともかく東京には未だ少し歸らない、明日は早く修道院へ立つ。

二

去る七日修道院へ着いた。

今、晩の祈禱が終つた。あかりが靜かに消えて、聖母マリアの聖像の在る祭壇の前の赤色の聖燈だけが闇に殘る。

ほの暗い中に修道士のけはひがする默想の時が來た。

窓帷のかげから見ると傾斜面の彼方の海に烏賊釣舟の火が見える。けれども雨が刷いてゐるので其れかと見らるゝばかりだ。

タルシス修道士は和蘭人だ。夜話は靜かで樂い。渠は神について多く云はず、たゞルーベンスの畫の話など靜かに語る。

内部の廊下にキリストの像が懸かつてゐる。その面は苦難の時拭うたところの布に寫つたものであると云はれてゐる。歴史的の考證は知らない。しかし其れを一度見ると其印象をとても忘れることが出來ない。ヨハネの首などは其比に非ず、長い强い顏で鼻は中程で一度屈折してゐる。額からも兩頰からも血が蠟涙のやうに流れてゐる。其思ひ切つた寫實は寧ろ慘酷の感を起させる。修道士は深夜にもこゝの廊下を通る。彼等の幻感はどんなものだらう。

朝早く牛舍に最初の太陽の光が照つてゐる。山も澤も澤に立つ林も皆清淨の感を與へる。夏ではあるけれども五月はじめのやうな心地がする。人も同じことのやうに思ふ。青年は如何に悅ばしいかといふことを感じる。

昨夜は雨がソボ降つて稻光りがした、四角な窓の闇にその稻光りがつんざいた。それに今朝は此樣に拭はれ洗はれてゐる。自然の變化は一樣でなく人間の行路もまた之れに似て居るとの感がする。年老た佐藤さんといふ執務は二十年東京を見たことが無い。今一度死ぬまでに行つて見ようと云ふ。けれども山と傾斜面と海とを擁した寂寞の天地が戀しくなつて、此處こそ俺の死場所だといふやうになるのは決まつてゐる。——

三

まだ東京は暑いことだらう。牧草の上に照る日を見てゐると此處はもう秋が來たように思ふ。犢と羊との番をするアンコと草原に臥て話をする。アン

コは十五ださうだが十二ぐらゐにしか見えない。アンコは孤児で神の教に隨うてゐる。汚れた服に長い靴を穿き手に樫の白い棒を持つてゐる。アンコとの會話。

「君は毎日何か考へてることはないか。」

「何も考へない。」

「ナゼこんな青い草が生えたり、それから冬に雪が降つたり、太陽が光つたりするか知つてゐるか。」

「知りません。」

「君はそれを知りたいと思ふのか。」

「知りたいと思ひます。」

「……　……　……」

このアンコはよく喧嘩をするさうだが、修道士達は特別に可愛がつてゐる。

十時半になると、小舍へ、牛を入れるのだと云つて時間を測るために太陽を仰いで見てゐる。海の音は靜かになり牛が草を食ふ音のみ聞える。

アダンは若い芽が伸びてゆくさうだがうれしい。

此處にはいろ〳〵めづらしい草がある。羊齒の葉を昨日手にとつて見ると僕は其葉の大小の部分が同じ方則で分化してゆくのを認めた。たゞ一ツの葉が先づ大きく裂けて其れから次の枝葉が出來、それからごく小さな枝葉となり終まひに細かな葉まで同じやうに裂けてゐる。天然は同じ方則をどこにも及ぼしてゐること、始めは一ツであるの意（聖書の、元始に御言あり）を表はしてゐる。

處女林で、何處にもワラビ、フキ、ゼンマイなどが澤山生えてゐる。耕地には燕麥、大豆などの畑が何町歩もつゞいてゐる。地は圓みを持つて緩い勾配でうねつてゐる。其間に澤（谷）が幾つもある。其澤には冷めたい水が木の

間がくれに流れてゐる。

下より築き上げて高く長い橋が溪谷に在る。之れは修道者自ら作つた。道は長く廣く而して幾つもある。修道者は此道路を眺めて更に美なりと感ずるにちがひない。

深く靜まつてから瓶をさげて水を汲みにゆく。星が黝色の雲の際に輝いてゐる。函館から今日歸つてから少し疲れたと見えて頻りに渴く。修道士のタルシスさんはかこひの葡萄酒を取りに行つて呉れた。暗い地下室でもあり就寢の時間がもう來てゐるので、最早覺束ない。下の矮林に水が落ちてゐる。室のランプを消して草履を穿いて出ると夜露が冷めたい。夜の修道院は高い森嚴な闇を築いてゐる。筧を探し當てゝ瓶をあてるとゴボ〳〵と音がする。濤の地響が間近に聞える。誰れももう起きて居る者はない。

四

こゝの修道者の中の外國人は大概佛蘭西人である。院長は氣高い風丰を持つてゐる。今日一人の靈父が僕の室へ入つて來た。此人は話して見ると牝牛の樣に柔しい。日本語で辛うじて話が出來る。

「私はヤブ醫者です、君が詩人だといふことを知つてゐます。ユーゴーを知つてゐますか。ラフオンテーンは知つてゐますか、みんな豪い。日本には澤山詩人が居りますか。」

「居ります。」

あなたはもつと善くなるでせう。」

と話す。佛蘭西人は皆聰明な樣に思はれる。トラピストの中には聖堂の設計者であり、且つ善き詩人である司祭も居る。

二三日こちら非常に陰鬱な天候になつた。霧が此寂寞の夜をこめ、修道院をつゝんでゐる。窓に滴がたれる。こんな靜かな晩に僕の心は千々に亂れてゐる。

體の熱が減じたやうに思ふ。石狩の方へも廻りたいと思ひ、今少し此處に居て錬磨したいと思つてゐたが、明日、或はあさつて出立して眞つ直に歸ることにする。

今この灰色の天候の下でよく晴れた日のことを思ふと夢のやうだ。悲に居て喜びを思ふ樣な心地がする。ぢきに既う寒氣が來る。夕日が壯大な影を落す谷間にも、或は聖典に讀み耽つた四阿の綠蔭の道場へも、もう顏を合はす折はあるまい。

今夜はタルシスさんが來て短い間逢つてゐた誼を語り合つた。そして神の上を話した。

聖父ベネヂクトの戒律は修道士の外は手にすることの出來ないものであるが、それを少しづつ書き寫すことが出來た。

沈默を守るべき條下にかういふ語が記してある、「多く語りて罪なき能はず」「死ぬるも生くるも言の權內にあり。」と。

彼等が如何に祈禱しつゝあるかを見るには、「吾人は信ず、神は到る所に現存し、主の眼は萬所に善人惡人を洞見しつゝあることを。然れども吾人轉務に從事する時は、尙更に此くの如くなるを確信せざるべからず」とある。

「修道士は如何なる時刻にも沈默を守ることを務めざるべからざれども、就中夜間に於て然せざるべからず。」と、又はたらきに就て、「荒蕪の爲めに自ら收穫に從事せざるべからずとするも悲しむに及ばず。蓋し吾人の祖先及使徒の如く、手業に從事して生活してこそ、眞に修道士とこそ謂ふべけれ。」

彼等は食後或は終課後に讀書する。「讀書は四五枚に及ぶべし。」この制限の

あるは適當に讀みて靜かに反復省慮することを重しとするからだらう。或時、僕がトラピストと共に聖堂に居ると、(それは早朝の二時から三時までの間だつた。)一修道士は、しばらくして僕の後方からランプと一つの本とを僕の方へ押しやつた。僕は其意を默解したから其本を手に取つて見ると、トマス・ア・ケンピスの「基督の模範」だつた。其れからして其本を僕は讀んでゐた。

修道士の中には藝術の才能ある人の有ることを前にも報じたと思ふ。その捉がある。「修友の中に藝術に通ずる修士あらば、謙遜恭敬の心を以て之を行使すべし、然れども院主の命令ありて後に於てのみ之を行使すべし。」

「されば若し彼等の中に才能に誇り修院に益したるを誇示するが如き者あらば之れをして其從事しつゝある藝道より離れしめ、謙遜りて詫びたる上、院主再たび之れに從事することを命ぜざる限りは、爾後之れに就くことを得さるべし。」

明日の天氣は益々惡いやうだ。海は荒れるだらう。あの波に安住なく搖られるのか。何の期するところなきはツライと思ふ。千九百十五年七月

トラピスト修道院より

聖小さきテレジアの詩

宗教的な深い愛を表はした點で、テレジア童貞の詩は余の讃歎するものである。テレジアは千八百九十七年に、佛蘭西リジュ市のカルメル會修道院で廿四歳を以て死んだ若い修道女である。基督教の信仰ある社會では、テレジアの名は丁度薔薇の花の薫りのやうに傳へられてゐる。誰も彼女を愛せぬ者はなく、誰も彼女を敬はぬ者はない。全く彼女のことを語る人々の面の上に微笑の漂はぬことはないのである。北海道のトラピスト修道院の若い修道女達の間では、テレジヤは十分な模範とされてゐるのである。

余は北海道のトラピスト修道院——その名天使園といふ——を想ひ出す。高い丘陵の上に、遙に海を望んで建られた建物、そこから見ると、海も山も

實に原始的で、大きい曲線の蜿りである。均齊的にしつらはれた花園と、其間を通る韻律的な小徑と、さうして其處を占めた燃ゆるやうな閑寂――それに引かへて、內部はしつかりとした廊壁に仕切られた空氣が、かぎりなく精神を落付かせる。そこの空氣には何となく匂がある。其匂は世外の物である。聖壇の在るところより少し隔たつて黑い格子が室を劃つてゐる。この制限的な莊嚴の格子を中にして其左方に、奧ふかく童貞女達が住んでゐるのである。高らかに鳴り出す鐘の音と共に、彼女達は聖堂に入り來つて格子に近くすゝみ羅典語の祈禱と聖歌とを捧げ奉る。その震動する、世にも稀な美しい合唱。

此修道女達は、云ふまでもなく神に奉仕してその生涯を送るのである。それ故に彼女達は此處に入るには、總ゆる世の羈絆を絕つてしまふのである。彼女たちが神に對する强い愛は、如何なる愛にも優る。彼女たちは實に我身以上の愛を抱いてゐる。余が一九一五年の夏、男子の方のトラピスト修道院に留まつてゐた時、一人の溫厚敬虔な青年と知つた。その青年は杉山國司君と云つて大阪の聖若瑟教育院に職を持つてゐる人であつた。余等は或朝、ボブラの並木が恰好よくつゞいてゐる道をあるきつゝ語つた。

「私は今度妹を修道女にしたいと思つて伴れてまゐつたのです。」と杉山君は心もち靑白い面に優しい微笑をうかべて言つた。

「お妹さんを！」と、余は思はず訊き返して杉山君の顏を見まもつた。

「彼女は、かねてから一生神樣の許で暮したいと申してをりましたから――漸うのぞみがかなつたわけです、もうお許宥も出ましたので、向うに三日居てこちらへ參つたのです。」

余は心を動かされた。そして此善い兄妹のために心から祝福を祈つた。

その妹と同じ童貞女であつた、幼き耶蘇のテレジアの自叙傳をその杉山國司君が余に贈つてくれたのであつた。余はそれから聖小さきテレジアの立派

な行爲に對して深い感興を抱くやうになり、その詩の歎稱者となつた。

小さきテレジアは神の奉仕者として又人として、柔かい布で包んだ玉のやうな美德を具へてをつた。彼女の兩親は敬神の念篤き人々であつたので、彼女の宗教的情操は生れるとから享繼いでゐたのであつたらう。幼年時代を回想して記した中に、「私はいつも此田園の清く美しい景色を見て、天國の事を偲ひ……」とか「吁壯大な海の景色！　夕映の見事さ！　私は永く〳〵、此金色の光線の痕を瞶めて……」とかいふ文字がある。其處には宗教的情操が詩的想像力と混じて表はれてゐる。後年に書いた詩の萠芽がもうそこにあつた。彼女の姉はやはり修道女で畫をよく描かれた。テレジアの肖像として今あるのは多く此姉が描いたものである。初聖體をうけた時の彼女の喜びは非常の物であつたらしい。「私は主を愛します、そして私の一生を主に獻げます。」——さうして彼女の運命は然ういふやうに導かれた。十四歳で修道女になりたいといふ切なる願を父に打明けたが父はまだ早過ぎると思つて許さなかつた。それからまた叔父なども嚴格に反對した。しかし遂に周圍の人々も同意するやうになつたけれども、肝心の修道院の方では二十一歳までは入れることが出來ない、併し司教の容許があれば通らぬこともない筈であつたので司教の許へ父が伴つて行つた。しかし司教もはつきりした應辭をして呉れなかつた。そこで今度は羅馬教皇に請願するより外なくなつた。小さきテレジアは再び父に伴はれて、羅馬に旅行した……そこで謁見が行はれた。「陛下よ。あなたが許すと仰有つて下さいますれば。他の司教樣たちは、さうなさるのでございます。」と彼女は小さな膝を折つて言つた。側にゐた副司教は不機嫌になり、二人の武官は斥けた。

しかし、間もなく彼女の願は聽かれ、遂に十五歳で千八百八十八年に、望みどほりカルメル會修道院に入つた。

修道女となつてからの彼女の辛苦は一通りでなかつたのである。云ふまでもなく修道院の生活は、孤獨を守り、忍從し、從順謙遜、苦行大齋をなし、完德に進むのであるから、非常な克己を要するのである。テレジアは斯う書いてゐる「私は最初に薔薇の花よりも茨の刺に逢うたのであります。」――薔薇の花よりも茨の刺。けれども此少女はそれに耐へることによつて、一層明らかな靈の道に進んだ。彼女の性格はもと〳〵柔和謙遜で同情が深かつた、そして天主の御恩惠によつて確乎とした意志の力と、その强い義務心とをその修道生活の中に養ひ得たのであつた。彼女は書いてゐる、「聖主は私に少しも戰を恐れない恩惠を與へて下さいました。それ故如何しても萬事を賭して任務を果さなければなりません。」と。

彼女は深く犧牲の喜びを知つてゐた。朋友が、「如何したら聖人になれようか。」と問うたのに對して、「日日の小さな犧牲を花として神樣に獻げる事とこたへてゐる。修道女として積んだあらゆる彼女の諸德はやがて「人」としても積まねばならぬ諸德であつた。さうして、それらの諸德はみな、神を强く愛することによつて學んだ。テレジアが修道女となつてから九年目、卽ち二十四歲で肺を病んで死ぬるまで一貫してゐるものはこの强い愛の精神である。彼女の確信の美に滿ちた詩の一句はそれを示す。――「此愛の一粒は、人々の靈魂である。」

テレジアの愛の感化は、廣く深く及ぼした。世界はそれにこたへた。各國の司敎等は彼女を福者の聖列に加へられるようにといふ願文を擧つて、羅馬敎皇に呈出した。わが東京大司敎ボーヌ師、函館司敎ベルリヨス師初め長崎、大阪の司敎も共に書翰を奉つた。

今、されど、余は彼女のアウトラインを書くことをやめて、彼女の一篇の詩を示さう。彼女の精神を知るには其方が遙かに有力で、捷徑であるから。

今日の歌

我命は、過去る一刻である。
我命は、逃去る一瞬である。
主よ！　この地上に生存へて、
主を愛し奉つるには、
今日一日のみ。

嗚呼耶蘇！　主を愛し、主を熱望す。
我爲に、甘味なる救主として、
今日我心に降臨り、
その微笑を與へよ、

今日一日の爲め、
主よ！「明日」は暗く閉さるるも宜し、
「明日」の爲に祈ることは出來まじ。
主よ！　御手を以て我を覆ひ、
我心に清淨を保たしめよ。
今日一日の爲め。

「明日」を思はゞ、我心變り易き事を感じ、
我心に憂ひ悶えの生ずるを恐る。
されど主よ！　我は甘んじ喜びて、
誘惑と苦難とを迎へん、

今日一日の爲め。

やがて、永遠の岸に於て主に見えん、
我が水先案内者なる耶蘇！
荒波に漂ふ、我小さき船を、
平和の中に導けよ、
今日一日の爲め。

主よ！　我を主の面影の中に隠せ、
其處には、世の空しき騒ぎ聞えず。
主よ！　我に其愛を與へ、
絶えず聖寵に滿たさしめよ、

今日一日の爲め。

主の聖心に近づき、世の果敢なきを忘れし我は、
最早敵の攻撃をも恐れず。
ああ耶蘇！　主の聖心の中に、
我席を與へよ、
今日一日の爲め。

生ける天のパンなる聖體！
聖體の中に在ます主よ！
我心に降臨り、宿り給へ、
白き「オスチヤ」なる耶蘇！

今日一日の爲め。

葡萄樹に譬へられし耶蘇！
我を主に一致せしめよ。
さらば、我弱き枝に實り
紫色の一房を獻ぐるを得ん、
今日一日の爲め。

此愛の一粒は、人々の靈魂である、
我は此靈魂を救ふ爲には、
唯今日のみ有つて居る、
嗚呼主よ！　使徒の愛熱を我に與へよ、

今日一日の爲め。

原罪なくして孕りし聖母よ！
主の光を復寫し、我をして、
主に一致させる、柔かなる星よ！
御身の被布の中に我を隱せ、
今日一日の爲め。

守護の天使よ！　汝の翼にて我を覆へ、
我親しき友なる天使よ！
汝の輝く光を以て我道を照し、
我足を導き、我身を助けよ、

今日一日の爲め。

我は雲なく覆ひなくして、
主を仰がんと望む。
主は下界に於て我側に在し、
その愛すべき御顏をかくさるは、
今日一日の爲め。

やがて暮なき日が近づき、
我靈魂の上に輝きし時、
我は主を讃美するがために飛び、
天使の七絃琴を以て歌はん、

永遠なる今日を……。

千九百十八年

善と勤勞との精神

今日、天候麗らかな紀元節の祝祭當日にあたつて後藤氏の善行表彰式を擧行するに至つたことは、我人共に慶賀に堪へざる次第であります。善を見ては是れを法とし、不善を見ては是を誡とす。後藤氏のなされし如き善行を何人も手本とし、法として、益々博愛慈善の德を磨きたいものである。又、是と反對に不善を見れば、この不善を誡として、相共に戒め合ひたいものである。

善をなすことはいと高き行爲である。さうして最も人間らしき行爲である。禽獸は善を知らず又是を施さない。人にして、善を思はざるものは禽獸に均しいと言つて宜い。併しながら、人は、善をなすとも其報を望んではならぬ。

報を望んで善をなすことは未だ眞の善と稱する事が能きない。善をなすことは人の任務である。他より報いられずとも善を施した者は其精神に於て幸福である。「與へらるゝものよりも與へる者は幸」である。善を以て自ら高めよ。人より高められんと欲するのでなく、自ら、心にきゝ、神の御旨に基きこれをなせ。これ人たる者の味ひ得る最大の樂みである。

人は富めるもあれば貧しきもある。貴賤貧富は決して一樣ではない。衣食足りて飽暖する者もあれば路傍に食を乞ふ者もある。かくの如く貴賤貧富の差が社會に餘り甚しきが故に所謂社會主義、共産主義等の運動が起つてくる。併し資産ありて、身は遊惰に送る者も、その遊惰は元より憎むべしと雖、彼等は、彼等の親なり先祖なりが、はたらきたるなれば、毫も羨むところのものはないのである。

人は働いて生くべし。創世記には「人は面に汗して食物を食ひてやがて土にかへらん」としるされてゐる。人ははたらくべき運命を以て生れてゐる。はたらくといふことが生存の一大事である。

はたらくものは人ばかりではない。すべてのものがはたらく。天地萬物を見よ。

歌をうたひて神をあがめ、感謝するばかりではない。はたらきを以て、はたらきの中に神をあがめ、感謝するのである。牛や羊は乳を以て或は其羊毛を人に供給する。蠶や鷄も然り。或は人のためにせずと雖、蜘蛛や、蜜蜂や蟻を見よ——これらみな天地萬物の者は働いてゐるのである。われらは祈りつゝ、はたらかねばならぬ。千九百二十年

トラピストより下りて

カソリシズムの幽林であるトラピスト修道院から下つて來た。向うにねる間、私は、神と偕に居た。神を識り、神を觀、神に奉仕してをつた。それが私の生活であつた。それが私及び其外の人々の生活だと言つて善い。四年の間私は教師をしてをつたが、その間に於て私の教へた者は司祭になるまでには、後、二三年の者も有る。追憶の多い庭園と別れをするのは、さすがは、殘り惜しいこゝちがされた。もう多分見る事もあるまいと思ふので歌など詠んで來た。その歌が八百程もある。詩を作つたり文を書いたりすること、さういふ事も彼地では、心にかなつた業だつた。併し私は、もう彼地を去るとて、心には喜びの滿つるものがあつた。それは自分の試練を十分に會はせて

いたゞく事を得たからであつた。もう其點に於て私は滿足を以て幽林を去る機であることを自覺して、遂に學友と手を分ち、又多くの信愛する教徒竝びに諸々の村民等と分袂したのである。あゝ四年の間、自分と共であつた修道士等は再び會ふ事はあるまいかも知れぬ。しかし、それにもかゝはらず分袖に當つて喜悅の心を感じたのは天國において再び必ず邂逅をするといふ確信が互にあるからだ。あゝ、もう、それらの人々と地上で見ることが無いにしてもわれ等は識る、天父は我等の再會する所を持たれてゐることを。これが自分の所感であつた。

次に私が其處に於ける生活を少し書いて見ると、聖堂に於いて神を參拜する外雄大なる自然に徜徉して、心から天主を嘆賞し、かぎりない詩情を縱にするを得た。彼の地は世界に稀な靈的美を有する感が、たしかに在る。そこの松林は、私を幾たび跪かせ、そこにて、ひそかに祈らせ、又、多くの詩を作らせたか、嗚呼。又、修友達の交誼は、世間の愛にまさる。彼等は皆、教友の親善によつて相愛することが、神に由つて出來るのである。世の別れには異るものがある。

雲の美しさを其處で、朝に夕に、私は、飽くこと莫くながめ、恍惚のこゝろを常に擁く。圓頂塔の聖堂を前とした蒼穹、それぞ、私の瞻仰したものである。夜は星宿が數知れず天上に羅列してその壯觀の美麗は言葉にも出だすことが不可能なほどである。今其のパノラマを描くことが到底私には出來ぬ。北海道の方に若しゆく人があつたら、そこを音訪れられるようお勸めする。若し彼の地に行かれたならその美を惜むこゝろを何人でも有つだらう。私は今、東京に歸つて來たけれども、しかし、其信仰の生活は、毫も變らぬと言ふ。私の心はトラピストに有るとても將都に在つたとて渝らないものである。寧ろ私は市井にあつてこの常住の信念に棲まうと惟ふ。これが我が告白して

憚らぬところである。もとより近隣に住む人々は異教の者である、けれどもそれらの人々も亦親愛なる我友であり、兄弟で有ることに於て、何の渝りがない。若しその愛を遍くして、人類が均しく宇宙の創造者で主宰者である我神を愛するならば人は皆手をつないでその喜びは譬へるに物がないであらう。

日本の宗教界を觀るに、皆逆睹し難いものと思ふ。奉仕の生活といふことを口には唱へてをつても、心に奉仕をしては居ないと思ふ。その外、邪道を貴ぶ宗派もある。これは悉く罪惡の甚しき宗教と思ふ。皆善い物にしなければならぬ。皆その改善を焦眉の急とせねばならぬ。時に大學者があつて、群民を濟度するやうな觀も呈はす事も有るけれども、さう云ふ者が此汚辱患難の現代に於て何の權力も無い。又社會主義のやうなものも共に世を濟ふ者ぢやない。カトリックの教義こそ人々を安寧に幸福に增さしむる良藥だ。今茲に於て自分が說くことは出來ぬ、たゞ廣く神を探す人々の爲めに一言しておくのである。そのやうな惱みを繰り返す者を現代は數知れぬ程澤山に有つてゐる。宗教の改革をせねば我が大和の國は危いと信ずる。

東京に來ての後も、トラピストに居る頃よりも、もつと善い信仰の生命を獲て過す心だけを持つてゐる。

大正十四年八月五日印刷
大正十四年八月十三日發行

（定價壹圓貳拾錢）

著作者　三木羅風

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社

電話牛込（長）八八八〇〇〇九番　六番　七番　八番

振替（東京）一七四二番

◀修道院雜筆▶

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二番　富士印刷株式會社

印刷者　佐々木俊一

●三木羅風氏三詩集

■蘆間の幻影

詩壇の巨匠三木羅風氏、想ひを練ること黄金を練るが如く、言葉を惜むこと寶玉を惜むが如く、夢寐に詩を忘れずして、詩を作ること甚だすくなし、數年間の勞作は漸く此の一卷をなす。幽玄をつくし、微妙を極め、縹渺たる神韻、象徴詩の至境に至れるもの、現下日本詩壇の最高標準を示すといふも溢美にあらず。別に散文詩十篇を添ふ。また是れその詩の如く珠玉に譬ふ可き名篇たり。

四六大版・價壹圓八拾錢
特製美本・郵送料拾錢

■修道院詩集 信仰の曙

現下日本の詩壇に於いて象徴派の領袖と目せらるゝ三木羅風氏、年來北海道の修道院に籠りて、トラピストの群に交り、祈りと默思との裡に敬虔なる求道の心を育む。『修道院詩集』は、即ち此の間の所産にして、第一編たる『信仰の曙』は、收むるところ四十有一篇、いづれも魂の底深くより歌ひたはれる幽玄沈靜の詩ならざるはなし。詩壇の一大收穫として、大方の人々に愛誦を薦む。

菊半截版・定價金六拾錢
紙裝美本・郵送料六錢

■青き樹かげ

收むる作品は主として歌唱に適する詩及び抒情詩「寄き樹かげ」「圓かな月」「秋夜曲」「詩寧景」「風車の歌」「アヴェマリア」「病める薔薇」等數十篇。——『現代詩人叢書』の第六編——

□新潮社出版□

聖フランシスの小さき花	久保正夫譯	四六特製 壹圓五拾錢 送料拾錢	フランシスと其門人との生活の記錄である。第二の聖書とも云ふ可きいみじき信仰の書で、彼を知るに此書第一である。
森の生活	ディー・ソロー著 今井嘉雄譯	中版布裝 貳圓貳拾錢 送料拾貳錢	大自然に隨順せる生活こそ眞の生活なりとし、ワルデン湖畔の原始林に起臥せる生活を野趣深き筆を以つて叙せる名著。
貧者の寶	メエテルリンク 吉江孤雁譯	菊半布裝 定價七拾錢 送料六錢	叡智に富める哲人が、現實を透視して見た深奥の眞理を、美しき階調を以て表白せる神祕主義の眞髓の論集。譯文流麗。
懺悔錄（全二冊）	ルツソオ 生田・大杉譯	菊半布裝 壹圓五拾錢 送料拾錢	一つの魂が幾多の境遇に輾轉して、深刻なる惱みと鬪へる數奇の生涯を一毫掩ふ所なく叙せるもの。世界的に高名の書。
孤獨なる散歩者の夢想	ルツソオ 新城和一譯	菊半布裝 定價九拾錢 送料八錢	「懺悔錄」の續篇。偉大な魂を持つ不幸な人の辛辣な苦悶と、孤獨な寂しさを掴むルッソォの晩年の內的狀態を描いた絕筆。
人生論	トルストイ著 相馬御風譯	三五版 價五拾五錢 送料四錢	トルストイの根本思想は、本篇に於いて遺憾なく窺ふことが出來る。眞に萬人必讀の書にして、人類最高最善の福音書。
性慾論	トルストイ著 相馬御風譯	三五版 價五拾五錢 送料四錢	最も嚴肅痛切なる性慾問題を曝世の大偉人により遺憾なく批判された。如何に峻嚴にして純潔な大思想の流れるかを見よ
トルストイ書簡集	石田三治譯	菊半特製 定價六拾錢 送料六錢	叔母さんに金をねだる放蕩士官としてのトルストイ、若き地主としてのトルストイ。赤裸々の杜翁を傳へる書簡數十通。

詩話會 川路柳虹氏 白鳥省吾氏 福田正夫氏 編

明治大正詩選

大好評 第七版出來す

菊大判特別製 四百三十頁 價貳圓八拾錢 郵送料拾八錢

古典的名著—不朽の大詩集—

作家八十四人 一人毎に肖像と小傳とを附せり

謂ゆる新體詩の創始時代より、現在に至る迄の代表的詩人の代表作を選抄し、これを年代順に排列して、明治大正の全景を一眸の下にあつめたもので、その規模とその實質とに於いて、實に出版界空前の一大詩集である。これが編纂に當つては、既に堙滅せる稀覯書をも尋ねて、詩集を閲みする二百有餘册。嚴正なる批判と周到なる選擇とによつて、古典的名篇を蒐めたもので、作者は八十四人、作品は二百七十篇。一人毎に肖像を掲げ、小傳を附し、卷末には五十年に亙れる精到の『年表』と、詳密を極めた『詩書一覽』とあり、明治大正に亘つて詩の精華は、全くこの一册のうちに盡きる。これ實にわが詩壇の過去を標する不朽の金字塔である。

批評一斑

◇明治大正にわたつて新しい文藝の花が咲いた、その詩に屬するものゝ中から粹の粹を選んで、一大アンソロジーを編んだもので、八十四人の代表作を收めてゐる。明治大正を展望するにより詩集である。詩壇年表詩書一覽は共に貴い文獻である。詩話會のこの企ては史的意義の深いものである事を感じた。(大阪毎日新聞評) ◇わが近代詩現代詩の百花繚亂たる歴史的展觀が一眸のもとに觀賞させられることの愉快なばかりでなく、詩作研究の上には動かし得ない重大な資材の寶庫として、絶對に尊重され得るのである。(讀賣新聞評)

544
34

終